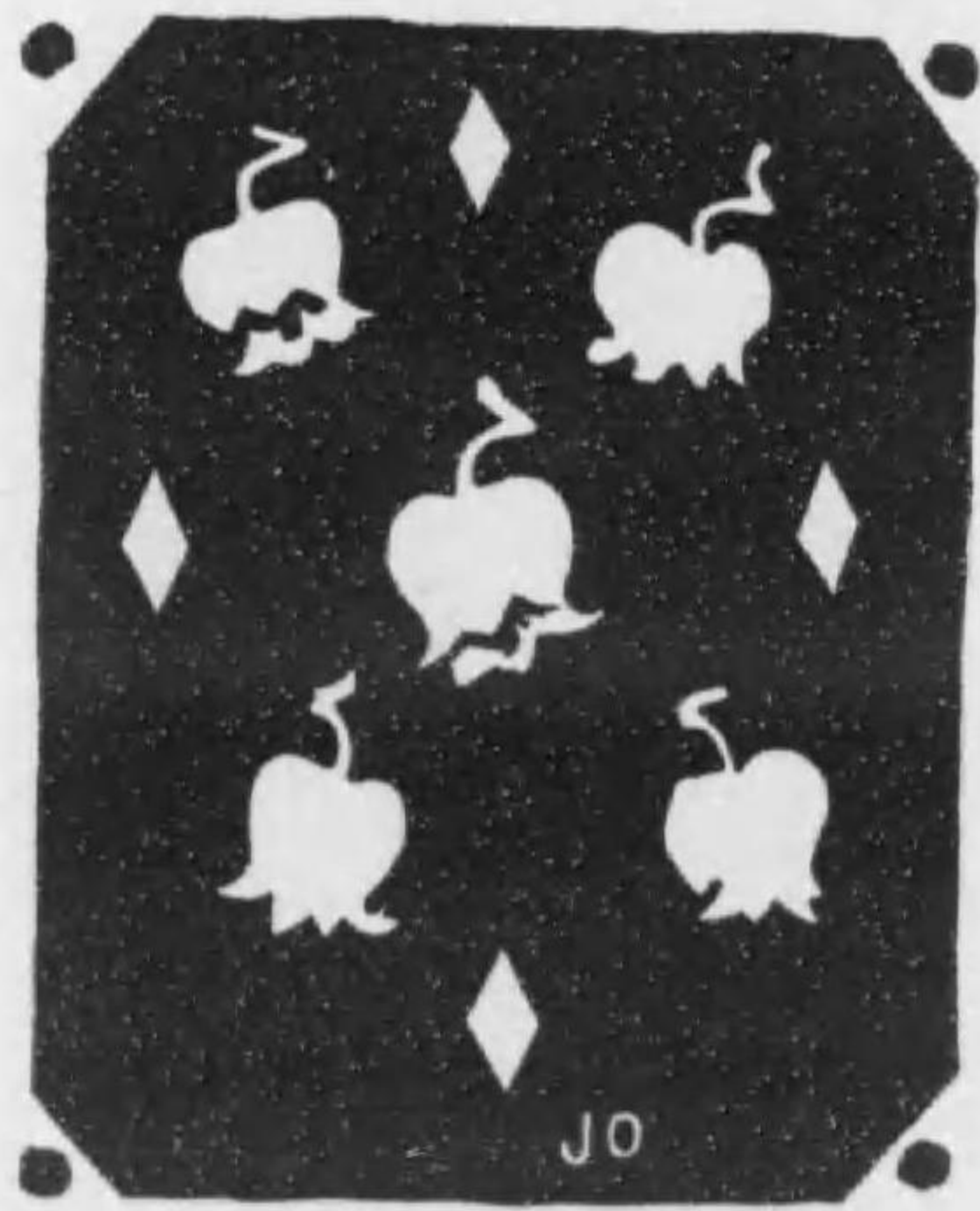


始



特14
512

蹟 奇 愛
作 譯 三 浦 關 造



京 東
行 發 店 書 田 山

大 正
5. 9. 29
内 交

序 文

今日午後、三人のユダヤ人が「僕等は藥劑師で露國から來た者です」といつて私を尋ねて來た。三人は私の書齋に這入つて來て切りに喜んだ。彼等は近代文學に關して特殊の知識を持つて居た。二十一になるバジンは餘り英語を話せなかつたが、切りに私の譯書を見て「私も文學で立つて行かうと思つて居る」といつた。英語を話せる年長の（二十五歳）ギョールマンは私の間に答へて、自分の信念を極めて熱心に語つた。彼は又ヂヤンクリストフを全篇讀んだといつて拳を握つて彼を讚美して居た。ドストエフスキーは全部讀んだといひ、トルストイ、チエホフ、

クープリン等露國近代の文豪は勿論、ポーヤ、オスカーワイルドや、佛國の諸文豪の傑作はこまやかに読んで居た。極めて頭の敏活な磊落な青年で、今迄藥劑師をやつて居つたが、これから亞米利加に渡つて、機關師をやるこいつて居た。私は「世界に於ける眞のコスモポリタンは君等ユダヤ人だ。僕は君等の生活に最も大なる興味を持つ」といつたが、年長のギョールマンは頭を振つて、

「いや、僕等はコスモポリタンではありませぬ。僕等は母國を持つて居ます。吾等は母國パレスチネを取りかへして、新らしい國を建てなければならぬ」と答へた。それから話は轉じてシオニズムの主唱者ハーズル博士と文豪ザングウイルを談じた。

私はザングウイルの小説と詩を読んだ事をいつたらば、ギョールマンは切りこなづかしがつた。

彼等はパレスチナを慕ひ、且つ近代文學を學んで居るだけに、少しも一所不住の流浪漢見た様な賤しいところが見えないばかりか、經驗が世界的で、何ものをも怖れない自信と高尚な志操を抱いて、しかも極めてよく人情を解し禮節を知つて居た。

私は机の上から、校正中のクープリンの本譯書の印刷物を示したら、三人は頭をつき寄せて、讀めもしないその印刷物を見て珍らしがつて居た。ギョールマンは、「僕はクープリンを露語で讀んだ。クープリンは極めて清新な問題フレッシュなを擱んで、特殊な自然と人生を、極めて美しく、滲み込む様な筆致で描く人だ」と

いつて熱心に賞めて居た。

私はクープリンに就て何か彼等に尋ねたいと思つて居たら、話
はそれからそれへご感興無限の中に移つて行つたので、遂に尋
ねることを打忘れてしまつた。彼等はトルストイを痛罵し、基
督教を嘲つて、眞の救世主がユダヤ人の間から出て來るといふ
極めて徹底した民族的信念を持つたシオン回復運動者であつ
た。斯くて三人はよく語り、よく笑つて夜おそく横濱の宿へご
歸つた。

私はクープリンに就て何か此の序文に書く筈だつたが、丁度今
しがた立ち歸つた三人のユダヤ人から多くの感興を與へられた
ので、彼等に就て一言して、彼等の語つたクープリン觀を只一

言茲に洩した。更に多くを語る必要もあるまいと思つたからで
ある。三人のユダヤ人に關しては近く一つの短篇小説を書きた
いと思つて居る。

更新文學社にて

大正五年八月二十五日夜

三 浦 關 造

愛の奇蹟

私わたしの下僕しもべで、お三さんさんと獵師れふしとを兼かねて居ゐる森もりの男おとこエルモラは、へへの字じに曲まがつて薪きの束たばを室むろに擔かぎ込こんで來きたが、ガツタリと其それを床ゆかの上うへに投なげおろし、凍こへた指ゆびに息いきを吹ふきかけ、

『よあ、旦那様だんなさま、素破すはらしい暴風あらしでござす』と暖爐だんろの前まへに蹲つくはみながら云いつた。『這麼こんな日ひには暖爐すこうでもウンと焼たいたがよい。時ときに旦那様だんなさま、マツチはお買かひ下くださつたか？』

『ごうだ。おいエルモラ、明日あすは兎うさぎが捕とれ相さうではないかね？』

『いゝえ……到底……旦那様。斯も怖ろしく荒しましては、兎の奴は縮み込んでグウとも云ひませぬ。明日は一匹だつて居やしません。』

運悪しくも、私は六ヶ月間ボラサの邊なるヴォルヒニヤの一寒村に住はねばならぬ事となつて、獵がせめてもの慰ともなり、仕事ともなつた。實際の處、私は初め田舎に行かふと決心した時、這處に堪へ難い憂鬱な事にならうとは夢想した事がなかつた。寧ろ私は喜んで出立したのであつた。

『ボラサよ！翁鬱と打茂つた森よ！自然の懷よ！單純なる人々よ！原始的自然よ！……』と私は客車に坐を占めて想像した……『異なる習慣を有し、特殊の方言を語り、多くの詩的物語りや、傳説や、果又床しい歌謠を有する全く吾が身にとつては目新しい人々よ！』

事實をさらけ出して懺悔するが、私は或る新聞に、人殺しや自殺に關する物語を書き終へて、吾ながら厭な感じのして居るところだつたから、斯ういふ單純無垢の田舎が殊更慕はしく思はれたのは無理も無い。

私の行つたペレブロッド村の土民は、極めて無口で、内氣だといふので、何うしてお手のものにしてよいものやら分らなかつたが、遙かに私の影を見ると、會長らしい奴が出て来て、眼前に近づき、『よくお出でなさいました』と云ふのだから、妙な分らない、粗暴な聲はり上げて親しんで來た。そこで私も彼等に話しかけようとしたが、はてな、彼等は訝かしげに私を見あげて、一寸した質問でさへ避けようとする。併し人情には變りのないもので、私の手に激く接吻して呉れた。さて、其の村に行つて程無く、私は携へて行つた本は讀み盡し、遂には無聊に堪へ兼ねて、此の地方の土民と親交を得たいと云ふ氣になつた。此の地方には四

里も離れてローマン、カソリックの僧侶が住んで居る。此の僧侶は風琴師殿と云つて、邊に知られた署長兼、近隣なる退職士官達の財産管理者であつた。

間も無く私はペレブロドの住民の爲、醫者の役をしてやらうといふ氣になつた。幸ひ、油や、石炭酸や、硼酸や、沃度の藥瓶を持つて居た。

ところが私の醫學上の知識には限りがある。で僅かの知識以外の事になると全然當すつぼうで向はなければならぬ。其に、何の患者も、病氣の容態が、「腹が痛む」とか「飲食が出来ない」といふ様な事はばかりであるから、猶更病狀が分らない。或日一人の婆さんがやつて來たが、右の拇指で鼻を擦つて、困り果て、途方から私の手をとつて接吻しようとする。私は手を引き込めて、

「婆さん、よし、其で澤山。離れてお呉れ。私は坊さんちや無いから、其麼

こととして貫はなくつてよろし。一體お前は何うあるのかい、」

「腹が痛みます。右腹が痛んで飲食が出来ません」と答ゆる。

「永い事痛むのかい？」

「何ういつたらよいだらう？」と婆さんは自問して居た。

「何だか、燃るように痛みます。」

そして、私が、何、其の位な事はと云つた調子で居ると、其れつきり、婆さんの病氣は明瞭とした徴候が現はれて來なくなつた。

「何、ご心配なさるな！」と或時官吏が私に忠告して呉れた事がある。「彼奴等は自然に癒ります。犬見た様に癒つて仕舞ますよ。私だつたら礫砂一塊で何麼病氣でも癒してやります。百姓が來ますと、私が何あるのかと尋ねます。すると弱りましたと答へます。で、礫砂の壘を鼻の下に差し出して、嗅いで見ると云ひま

す。奴が嗅ぎます。もつと強く嗅いで見ろ。復嗅ぐ。よろし、大ぶんよいだらう。え、少しはよい様です。よろし、其じや、歸つて信心せよ、と云つて置けば癒つて仕舞います。』

其から又私の厭だつたのは、彼等が人の手に接吻する事だつた。或者は無闇に飛びかゝつて来て一生懸命私の長靴に接吻しようとする。是は嬉しさの餘りにやるのでは無く、長年月の奴隷根情と悪習慣から生じたにくむべき悪習である。私は百姓達が喜んで官吏や、署長の大きな赤靴に接吻するのを見て不思議でならなかつた。

そういふ事で、醫者の役も厭になり、遂私は獵がせめてもの慰となつた。然し正月の末になると獵も出来ない程怖ろしい空模様となつた。毎日怖ろしい風が吹き荒んで、夜毎雪の上に氷の厚い外皮が結び、其の上を野兎が足跡をも残さず

に走つて行く。

私は一室に孤坐して怒號する風の音に耳傾けて居ると、何故とはなしに物悲しくなつて來た。で、無邪氣も、氣の取りまぎらはしに、エルモラに文字でも教へてやりたいと云ふ氣になつたのは無理も無い事だ。

然し此の考へは奇怪な事から起つたのである。或月私が手紙を書いて居ると、突然私の眞後に人の立つて居るけわいがある。ふり向くと何時もの様に柔かい半靴を穿いて音をたてずに這入つて來たエルモラである。

『おい、何の用だい、エルモラ？』と私が尋ねると、

『用ではありませんが、まあ、驚きましましたなあ。旦那様、どうして、其麼に書けますか？私も其麼に書けたら面白からう……いや、旦那様程書けるには及びませんけれど』と彼は私の笑つて居たのを見て早口に答へた。『私はせめて名字丈な

りと書きたいなあ。』

『何故書いて見たいと思ふのか?』と私は訝しげに問ふた。……扱茲に云つて置かねばならぬのは、エルモラはペレブロード全村で誰知らぬ者の無い貧乏人で、おまけに怠惰者で、賃錢や、日雇ひの所得は、悉く酒の代にして仕舞ふといふのである。世間に牛の数は多いが、彼に使はれて居る牛程悲惨なものは又どあるまいとの事である。

考へた處で、彼に読み書きの必要な機会があり相には思はれぬ。

私は復訝しげに尋ねた。

『何で、お前は名字の書き方を習ひたひといふのかい?』

『左様でござす……。斯ういふ理でござす……。』とエルモラは何時もに變つた説明的の口上で答へた。『此の村には一人だつて字の書ける奴が居りまへん。村の事

やら色んな事で、書附に印がある時でも……何處に印をおしてよいやら分りまへん。會長が印丈は捺しますが、何が書いてあるのやら、根つから讀めまへん。でござすから、誰か書く者が居つたら、皆の爲になります。』

エルモラにとつて斯ういふ心配だ。盜棒根情の根深い奴、無頓着な無頼漢にとつて夢にさへ見なかつた自治村の意見——あ、斯る憂ひ、吾が生村の幸福を希ふ憂ひ……それが私の心に觸れた。で私は教へてやらうと決心したのだつた。けれど、可愛想に望は無かつた。彼に読み書を教へようとは無理な話であつた。

エルモラ——しかも森の小路を知り盡して居る彼、森の木の名を悉く知り盡して居る彼、晝も夜も、何處處にでも耐へ忍ぶ事の出来た彼、狼や、兎や、狐の足跡を見わけることに敏活な彼——そのエルモラは例へばMの字とAの字を一緒に構み上げると、何うしてマといふ音になるかといふ事がよく分らない。『何う

いふわけだらう〜』と彼は十分間位は黙つて考へて居る。そして其の沈んだ黒い眼、瘦せた黒面、兇暴な黒鬚、大きな頬鬚をかすめて絶頂に達した心の苦痛が現はれる。

『さあ、エルモラ、マと云つて見ろ。只マと一言だ』と私は囁きました『紙を見な

いで俺を見ろ。マーだよ、マー。』
するとエルモラは悲しげに嘆息吐いて、テーブルの上に拇指をおさへつけて傷ましげに決心して『否、云へませぬ』と云ふ。

『云へない事があるもんか？容易い事だ。只マーぢやないか。俺の云ふ通りに云つて見ろ。マー。』

『いゝえ、云へませぬ。もう忘れしました。』

凡ての方法、手段、工夫は此の非凡な魯鈍な頭を反つて混亂さして仕舞つた。

けれ共エルモラの進歩的教育に對する鋭利な精神は微塵も減じなかつた。

『私は名だけ覺ゆればよい』と彼は怯々と懇願した。『只名前のエルモラ、ポブラチャーク丈でよろしい。外の事はご免被ります。』

智的に教へても駄目だから、今度は機械的の教授法をとつた。すると、反つて機械的方法は妙にエルモラにとつて氣易い様で、二ヶ月の末には名字丈は何やら覺へ込んだ。

毎晩エルモラはストーブに火を附けると、私から呼び寄せらるゝのが待ち遠くてならぬといふ様な有様で居る。

『おら、エルモラ、一つ教へてやらうか？』と私が云へば、彼はテーブルに臂杖ついて、黒くて硬い指の間にペンを挿込み、臂を上げて私に問ふ。
『書してようござるか？』

『よろし。』

エルモラは念を入れて初めのPの字を書いて、疑はしげに私の顔を見て居る。

『何故書いて仕舞はぬのか？ 忘れたかい？』

『はい忘れませんでした』と悲しげに頭を振る。

『ゑゝ、子供らしい奴だな。よし、輪を書け』

『あはー、成程輪だった、輪だった。知つてをりますぞ〜』とエルモラはピカリと目が醒めた様に顔を輝かし、紙の上に筆を真直に立て、カスビヤ海の外廓の様なものを書く。

書いて仕舞ふと、暫らく黙つた儘、頭を右に振り、左に廻して、目をしばたさ自ら感心して居る。

『何故止したんだ？』

『一寸待つて下され。今直ぐ……』

二分間ばかり考へて彼は怯々と尋ねた。

『前の奴と同じですか？』

『うむ、書いてしまへ。』

這麼風にして少しづつ最後のKの字に達する。Kの字は端の方に尾のある一本の杖と、中央の曲つた杖だと云ふて書いて居た。

『旦那様、何うでせう？』とエルモラは書き上げた嬉しさに、無邪氣な誇り顔を示して云つた。『これから五六ヶ月も稽古しましたら、もつと上手になりませうか？』

エルモラはストーブの前に蹲^{うづくま}まで、木炭を攪^かき廻^{まは}して居た。私は室^{むろ}を彼方^{あつち}此方^{こつち}と歩いて居た。凡^{すべ}てで二十も室のある大地主^{おほぢぬし}の家に、私は一室^{しつ}を占有^{せんいう}して其れを客間^{きやくま}にもあてゝ居たのだ。

残^{のこ}りの室には錠^{じやう}がおろしてあつて、絹蔽^{きぬかほひ}のある古い器^きや、珍^{めづ}らしい青銅^{せいどう}の器^きや、徽生^{かひは}へ銹生^{さびまき}じた嚴^{おこ}かな昔^{むかし}の像^{ざう}が收^{おさ}めてある。

風^{かぜ}は家の壁^{かべ}に狂^{くる}ひ廻^{まは}つて、満腔^{まんかう}の怨恨^{うらみ}から暗黒^{あんこく}の中^{なか}を呻^{うめ}き叫^こぶ。夕^{ゆふ}べの雪暴^{ゆきあらし}は段々^{だんだん}重^{しげ}くなつた。丁度^{ちやうど}、誰^{たれ}か外側^{そとがは}に居^いて、美しい乾^{かわ}いた雪^{ゆき}を手^てに一^いぱい攪^{つか}んで窓硝子^{まどがらす}に激^{はげ}しく擲^{なげ}ける様^{やう}。

四邊^{あたり}の森^{もり}は憂鬱^{いううつ}な神秘^{しんひつ}な小止^{こど}み爲^ない威赫^{ゐかく}を以^{もつ}て私語^{さご}ぐ。

風^{かぜ}は空^{そら}しい室^{むろ}に忍^{しの}び入^いり、ストーブの煙筒^{えんとう}を吹^ふき下^{くだ}り、穴^{あな}だらけの古^{ふる}ばけた家^{いえ}は、凡^{すべ}て震^{ふる}ひ出^だして今^{いま}にも倒^{たふ}れて微塵^{ひじん}に碎^{くだ}けそう。と見^みるまに不思議^{ふしぎ}な音^{おと}を持^もつ

生靈^{いきりやう}の様^{やう}にも思^{おも}はれて、思^{おも}はずハット私^{わたし}は耳傾^{みみかたむ}ける。

何物^{なにもの}か遙^{はる}か廊下^{らうか}に呻^{うめ}いた。深^{ふか}い、破^{やぶ}れた悲^{かな}しい嘆息^{たんそく}。

何^{なに}か遠^{とほ}い彼方^{あつち}に乾^ひからび朽^{くち}ちた板^{いた}が只^{ただ}一聲^{いっせい}軋^{こま}つた。

すると私^{わたし}は吃驚^{びっくり}した。私^{わたし}の室^{むろ}に通^{かよ}つて居^いる廊下^{らうか}に誰^{たれ}やら注意^{ちうい}深^{ふか}く執固^{しつこ}く推開^{おしあけ}戸^との柄^{えい}をコジめかして居^いるかと思^{おも}ふと突然^{とつぜん}凄^{すさ}まじく全家^{ぜんか}引割^{ひきき}かれむばかり窓^{まど}も戸^とも怖^{おそ}ろしく震^{ふる}ひ出^だす。又^{また}ストーブの煙筒^{えんとう}に忍^{しの}び入^いつて痛^{いた}しげに悶^{もだ}はしげに絶^たえ間^ま無^なく唸^{うな}る。其^{その}の聲^{こゑ}が段々^{だんだん}高^{たか}く鋭^{えい}く貫^{つら}く様^{やう}な嘯^{うそ}きになるかと思^{おも}ふと半^{なか}ば低^{ひく}く息^{いき}を止^とむるのである。何^{なに}うかすると此^この不思議^{ふしぎ}な來訪^{らいはうしや}者は何處^{どこ}からとも無^なく私^{わたし}の部室^{べむろ}にさへ侵入^{しんいり}して來^きて、ゾツとする寒^{さむ}さを以^{もつ}て私^{わたし}の後^{あと}を横切^{よこき}る。すると、ランプの光^{ひかり}が焦^{こが}れた緑色^{りよくしよく}の紙^{かみ}の蔭^{かげ}を洩^もれてチラ／＼と淡暗^{うすくら}くなる。

不思議^{ふしぎ}な何^{なに}とも云^いへぬ不安^{ふあん}が私^{わたし}に臨^{のぞ}んで來^きた。恰^{ちやうど}度^ど私^{わたし}は開化^{かいくわ}せる人類^{じんるい}の間^ま……

女の笑聲や男の話聲の聞ゆる社會から一百里も遙か隔つた森と吹雪の中に埋れた一村の真ん中にある古代の家に憂鬱な雪の夜寒を終夜坐り明して居る様に思はれた。そして私は此の雪の夜が數年も數十年も否私の死ぬるまでも引き續くだろふと云ふ様な感じがした。斯くて風は窓に吠ゆるだらふ。斯くて私は不安にも只ブラブラと室中を歩かなければならぬだらふ。

でも世界に比類ない、お黙りの變物エルモラは、家族が飢ようと風が荒れようと、また私が不安な神秘的な悲哀に襲はれようと、一向平氣で只坐り込んでばかり居た。

「急ち私は人間の聲の響で物狂ほしい此の寂寞を破らむどの要求を禁ずることが出来ず、

『おい、エルモラ、何うだね？今日の風は何處から吹いて來るのかい？』と尋ね

た。

『風でござるか？』とエルモラは惰い頭をもたげて繰り返した。

『旦那様、貴方は眞乎に御存じなさらないのでござるか？』

『勿論知らない。分らう筈が無いぢや無いか？』

『本當にお知りなさらぬのですか？』とエルモラは起き上つて云ふては、『そんなら話させう』とて續ける、其の聲は神秘に震えて居た。『話しますせ。巫女が産れると、巫女達が喜びます。』

『巫女だつて？魔法使ひの事か？』

『はい左様！左様！魔法使でござす。』

これは占めたと云はむばかりに私はエルモラに向つた。『此奴は面白い』と私は考へた。『これは何でも、魔法か埋れた寶か巫女か化物かに關して彼奴から面白

い話を聞き出せるなあ。』

『へえ、其れでは、此のボラサに……巫女でも居るのかい？』と私は問ふた。

『私はよく知りませんが居るかも知れませんが』とエルモラは相變らぬ呑氣さ加減。復ストロブの前に俯向く『年寄達は居つたと云ひますが！嘘かも知れませんが』私は忽ち幻影を打消された。

エルモラの特性は頑固なお黙りで、私は辛の事で此の面白い問題に就て、彼より、もつと何か引張り出さうとすれば、驚くまい事か、彼奴はコクリ〜と居眠つて、私はそつち除けにストロブにでも話し掛けて居るかの様に何かグド〜云つて居る。

『五年計り前にや巫女が居ました。子供の放等が村から追ひ放りました』

『何處に追ひ放つたかい？』

『何處？森の中でなければ、何處に遣りませう？して彼奴等は巫女の小屋を叩き壊しまして、淡氣味悪るいあの洞に屑一つだつて残さなりました。そして彼奴等は首や髪を引纏んで巫女を引張り出しました。』

『何故其麼事をしたのだい？』

巫女故に種々な不幸がありましたもんで。巫女は誰とでも喧嘩して、家と穀物を呪ひました。何うかした時、巫女が村の若い女に二十錢呉れど云ひますと、女は少つとも持たぬと云ひましたとかで！「いゝわ」と巫女が云つた相です「でも記憶て居れ、お前が私に二十錢呉れなかつた事を」。其れから旦那様は何う思ひなされるか？丁度其の時女の子供が病氣になりました、段々悪くなつて遂死にました。だから子供達が巫女を追ひ放つたのです。うらめしい巫女奴……』

『ほ。して其の巫女は今何處に居るのかい？』と私は好奇心に驅られて續けた。

『何處に居りますかかつて?』とエルモラは何時もの調子で間の脱けた様に操り返す。『何うして私が知りませう?』

『巫女の親類は誰も村に居残つては居ないのか?』

『い、え、誰も居やしません。彼女は他處の女ですもの……彼女が村に來ました頃は私は未だ小ぢやな子供でしたが、其の時分彼は孫娘を一人持つて居ました。其れを村の者が追つ拂つて仕舞つたのでござす。』

『それでは、もう誰も運命聞きに行つたり、符呪やつて貰ひに行つたり、迷魂符をやつて貰ひに行つたりしないんだね?』

『田舎女が行きます』とエルモラは蔑視んで云ふた。

『あはあ、それぢや、居る處が分つて居る筈ぢや無いか?』

『私知りまへん……人はバツフ、クートの近邊の何とか云ふ處に居ると云つて居

ましたつけな……旦那それ、イブノスキの近邊の沼を御承知ですな。そうく其の沼の中に居まして、熱病を癒して居るとかいふんでござす』

『それでは、巫女は茲から二里半ばかりある處に住んで居るのだ——本當に住んで居る森の巫女だ!』

一念茲に至るや私は躍起となつた。

『おい、これエルモラ!俺は何うしたら其の巫女と知合になれるだらう?』

『ツ—!』とエルモラは腹立たしさに唾氣した。

『大吉が貰はれませせ』

『大吉だつて、凶だつてかまはない。何うあつても行つて見よう。もつと暖かくなつたら早速出掛けるぞ、勿論貴様が途を教へて呉れねばならぬ。』

この最後の言葉を聞くにエルモラは吃驚して、床から飛び上つた。

『私が?』彼は憤怒上つて叫ぶのである『眞平ご免。私は行きません。』

『何だ、馬鹿な、行かぬといふことが出来るか?』

『いや旦那、私行けまへん。何うあつても行けまへん。何故行かねばならぬと仰しやるのでござす?』と彼は復剣呑至極だと云はむばかり『何故私は巫女の洞穴に行かねばならないのでござすか?』神様のお咎め。旦那様もお出なさつてはいけまへん。』

『貴様は何うでもしろッ、俺は何うしても行く、行つて見たくて堪らないぢや無いか?』

『行つたつて何も面白いことあはせん』とエルモラはストーブの戸をガタめかして云つた。

それから一時間も経つて、エルモラが銅瓶を運んで、眞暗な出で口で茶を啜り

歸宅しようとする處を『巫女の名は何だ』と、私が問ふと、

『マヌイリカ』と、氣重しげに短かく答へた。

エルモラは何事も起つても自分の感情を發表する事は出来なかつたもの、私に激く歸依して居た。其れは只私が嬉戯を好んで居ると云ふからばかりではなく、私の深切な待遇に依るといふばかりでも無く、又私が飢えて居る彼の家族に屢々施して與ることに由るばかりでも無く、全世界で只私一人が飲んだくれ者なる彼を賤めなかつたからである。これにしても私が巫女と知己にならふといふ決心は彼に敵意を起さしめ、彼は鼻息荒く、側の犬リャブコを蹴つてツカツカと戸外に出て行つた。哀れなるリャブコは怖わそうに吠えて一方に蹴飛ばされたが泣きながらエルモラの跡を追ふた。

三

三日たつと稍暖かになつた。其の朝、早くにエルモラは私の室に這入つて来て、いきなりに、

『鐵砲を掃除してご用意なさい、旦那』と云ふ。『何故だい？』と私は毛布の下に踏んぞり反つて尋ねた。

『昨夜兎が出ました。澤山足跡があります。鐵砲を持つて出かけてはごうでせう？』

エルモラは森に行きたくて堪らないのだが、冷淡な様に見せかけて堪らない遊意を蔭して居る。

實は、彼の單銃は已に控間に用意されてあつた。たどへ其の銃口のあたりは錫

で數箇の綴がして、所々鏽や火薬の瓦斯が鐵を喰つて凸凹になつて居たけれ共、其の銃先から鵠一羽だつて逃げた事は無かつた。

吾々は辛うじて森の中へ辿り着いて兎の足跡を見出した。一つ越しに前に小さい足跡が二つ列をなし、後に又二つ跳ねて居る。

忽ち兎が路に出た。一間ばかりビヨンビヨンやつたかと思ふと一飛に路から縦の森に逃げ込んで仕舞つた。

『よし来た、取り廻して彼奴をひつ捉えてやろふ』とエルモラは躍起となつた。

『旦那様、お出なさい』——と云つて彼は目を閉ぢて秘密を考へたが『旦那様、あの古屋に行つて下さい。私はサムルインから彼奴を追ひます。犬が奴に追つ着くと、私が旦那に會圖します』とて私に指圖した。

彼は、工夫通りに小灌木の茂みへと大急ぎに姿をかくした。私は耳を澄まして

立つて居た。コソとだも彼が廻り行く足音は聞えず、ミナの木の皮で纏ふた彼れの足に踏み碎かるゝ木の枝一つだつて音をたて無かつた。

私はやをら古屋の方へと歩み出して（頼れかゝつた人無き小屋だ）樅の森の端なる、亭々と聳えた松蔭に立つて居た。至極閑静な日、冬の森でよくある様に、何も彼も寂寞として聲を秘めて居た。壮大な雪の塊がごの枝にも纏ひ着いて、幻想に更つて居る様に悦ばしく楽しくされど寒い姿で垂れ下つて居た。時々優しい枝が梢からポキリと折れると意外に遠い響がして、別な枝に倒れかゝる。

雪は日光をあびて薔薇色に輝き、蔭は青藍色を呈して居た。此の宏大なる氷の静寂として聲なき力は、私を威服して時の過ぎ行くのも分らなかつた。

俄然、森の彼方に犬の聲がした。獲物の臭を嗅きつけて、鋭く、しかも一生懸命に激憤して將に吠えかゝらうとする獵犬の叫びだ。

又同時に私は、犬の跡を追ながら嚴しい聲はり上ぐるエルモラの聲を聞いた！

『ホーイ』（行けッ）それが『殺せ』と云ふ様に響いて居た。

音の方角で判断すると、獲物は私の左手を通過しそうであつたから、愴惶て、私は兎を待伏せせむと、林の空地へ走り寄つた。

けれ共漸く私が二十歩行くと、大きな灰色の兎が木株の後から飛び出して、急いでは居ない様に見せかけながら只其の長い耳を後に寝せ、僅か跳躍數歩路を開いて森の中へと姿を隠した。

リヤブコは貪狂に其の跡を追ふたが私を見ると微かに尾を動かさし、大急ぎで雪を口に一ぱいバクツと喰へて再び兎を追つかける。

急ちエルモラが森の中から足音たえずに飛んで來た。

『何故路でお射ちなさうなかつたか、旦那？』と昂憤して居る彼は齒切して叫ぶ。

『遠すぎた—二百歩より』

私(わたし)がまごついて居るのを見るとエルモラは聲を柔(やわ)らげ、

『そうでしたか。かまいません。捕(とら)えられますぞ。イソノブスキー路(みち)にお出(い)でなさい—確かに其處(そこ)へ出(で)ます』と云(い)ひ放(はな)つが早(はや)いか復(また)しも駈(か)け出(だ)す。

私(わたし)はイソノブスキー路(みち)へと出立(いっしゅ)した。そして二分間(ふんかん)経(た)つと遙(はる)かならぬ彼方(かなた)に再び一生懸命(しやうけんめい)に叫(さけ)ぶ犬(いぬ)の聲(こゑ)がする。

激感(げきかん)一番火(いっぺんひ)の附(つ)いた様(よう)になつて私(わたし)は走(はし)つた。銃尾(じゆうび)を掴(つか)んでセツセと矮林(あいろん)を分け、枝(えだ)を踏(ふ)みくだき、疵附(きずつ)かうと何(なに)しやうと一向(いっこう)かまは無い。長い間(ま)斯(か)うして走(はし)つて向(む)を變(か)へようとする途端(とたん)犬(いぬ)の聲(こゑ)はハタと止(や)んだ。私(わたし)は歩(ほ)を緩(ゆる)めて進(すす)んだ。眞直行(まっすくい)つたらキツト、イソノブスキー路(みち)でエルモラに出會(であ)ふだろうと思(おも)つたから。

けれ共(とも)ハテナと私(わたし)は辿(たど)りながら思(おも)ふた。路(みち)の事(こと)は考(かんが)へずに灌木(くわんぼく)を避(よ)け、木株(こかぶ)に

喘(たぎ)されつゝ道(みち)に迷(まよ)つたのだ。

其處(そこ)で私(わたし)はエルモラを呼(よ)び初(はじ)めた。何(なん)の應(こた)へも無い。

間(ま)も無く私(わたし)は無我無心(むわむしん)に進(すす)み續(つ)けた。森(もり)は段々(だんだん)まばらになつて來(く)る。地(ち)はダラ／＼と下(くだ)つて其(その)果(はて)に小丘(せうきう)がうね／＼として居(ゐ)る。

私(わたし)の兩足(りやうあし)に印(いん)せられた跡(あと)は、間(ま)も無く黒(くろ)くなつて水(みづ)で充(み)たされた。時々(ときとき)は膝(ひざ)までヅブリと足(あし)が沈(しづ)む。餘義(よぎ)なく私(わたし)は丘(か)から丘(か)へと登(のぼ)つた。足(あし)は濃褐(のうかつしやく)色の苔(こけ)に沈(しづ)む。地(ち)はさながら柔(やわ)らかな絨氈(じゆうたん)の様(よう)。

忽(たちまち)ち灌木(くわんぼく)は跡(あと)を斷(た)つた。前(ぜん)方(ほう)には雪(ゆき)で蔽(おほ)はれた圓形(えんけい)の澤(さわ)がある。其(その)白(しろ)い纏(てん)衣(い)の下(もと)から其處(そこ)此處(ここ)へと小丘(せうきう)が現(あら)はれて居(ゐ)る。澤(さわ)の向(む)ふ側(がわ)には木(こ)かげに小屋(こや)らしなもの、白(しろ)い壁(かべ)がチラホラ見(み)える。『誰(だれ)やら屹度(きつと)、イリノブスキーの仙人(せんじん)が此處(ここ)に住(す)んで居(ゐ)るに相違(さうみ)無い』と私(わたし)は考(かんが)へた『行(い)つて道(みち)を聞(き)かふ』

けれ共澤を廻つて小屋に達するのは容易な事ではなかつた。

私は辛うじて澤の上を歩んだ。ピチャリ〜と一足毎に踏み潰した水が靴の中に這入つて来る。足引き脱ぐのが仲々の厄介だ。

漸く澤を越えて、小丘の上に登ると、確かに小屋がある。小屋と云つても假そめの小屋で昔嘶にでもありそつな茅屋。其れも地にはつかないで杭の上に建ててあるのは春になるとイリノブスキー森林の全體を浸す洪水があるからだ。其の一方は古び朽ちて倒れ、哀れなる廢頽の様を呈して居る。窓には數ヶ所硝子が缺けて、其の代りに汚ない襪襦の束が差し込んである。

私は鑿を壓し下して戸を開けた。永い間雪を見て居たので、小屋の中は眞暗でスマイレ色の珠が見えて来て何が何やらさつぱり見分が附かぬ。

『ご免、ごなたか、お宅ですか?』と私は聲高によんだ。

ストーブの近くに何か動いた。少し近づいて見ると地面に老婆が座つて居る。其の前に鳥の羽根が澤山積んである。老婆は一つづつ羽根をどつては、羽毛の處をむしつて、籠の中に入れ羽軸のところは地に投げ棄て、居る。

『此處はマテイリカの住家だ、イリノブスキーの巫女の家だ』と、老婆の姿が見えるが早いか、俄然私の心に閃めいた。國々の歌が其の國家を代表する如く、巫女の全性格は其の顔に見えて居た。其の瘦せ凹つた頬は出張つた鼻と殆んど合する様に、長く鋭い淵んだ顎に終つて、悉く脱けて仕舞つた齒無し口は絶間無く何かを噛むで居るかの様に動いて居た。短かい赤目蓋のある冷たい圓い突起せる其の色褪た眼は肉食鳥の目のようである。

『今日は、阿母』と私は出来る丈丁寧に云つた。

『あなたはマヌイリカさんぢやありませんか?』

すると婆さんの喉の中がドクドクとガラガラと鳴つて、齒の無いモググとした口から不思議な音が出て来たが、最初は古鴉のクワクワと鳴く聲の様だったが直ぐ嘎れた破れ聲になつて仕舞つた。

『もどは、いゝ方々が私をマスイリカと云つて下さつた様ですが、只今は誰も私の本名を呼びます。何か運でも試して貰いたいと仰つしやるのですか？何の御用で被居るか？』と婆さんは單調な仕事を止めないで無愛想に答へた。

『私は道に迷つたんだす。ミルクを少し頂かれますまいか？』

『私はミルクなんか持たないよ』と婆さんは氣嫌悪しく答へた『お前の様にノソソ歩き廻る奴が森の中に何人も居る。何も飲物などは恵まれないよ。』

『お前はお客様に少つとも情が無いのね』

『そうよ。情なんか知らないよ。お前達の便利のいゝ爲に何も貯はへては居な

いから、でも疲れて居たらお掛けなされ、誰も追ひ出しはしないから。諺にもあるだらう、垣根に来て坐つて酒宴の音は聞いていゝが一緒になつてはいけないつて。だからねえ——』

話が斯う變つて来る矢先、私は此の婆さんはきつと近頃茲へ移つて来たのだと氣が附いた。

婆さんは相變らず機械的に仕事を續けながら、始終ブツブツ何か一人語云つて居たが、低くてもちつとも分明しなかつた。

すると一向連絡の無い途方もない言葉が聞えた『マスイリカの住家は茲だよ……誰だねー分らないー私はもう斯うした年寄だもの……お前は足も動けるし、お晝舌も出来るー丈夫な鵲だもの』

私は黙つて暫らく耳を澄まして居ると、これは氣狂女で私を恐れて身震ひして

居るのだといふ考へが浮んだ。

それから室中を見渡した。微塵に碎け落ちそうな大きなストーブが小屋の大部分を占めて居る。隅の方には聖像がない。壁には、大抵の家なら、緑の頬鬚の生えた獵師、スミレ色の獵犬、誰にも知られない大將の繪があるものだが、其れも無くて、枯木の束や、萎びた小根の束や、臺處用器具が懸つて居る。梟も黒猫も見え無いが、二つの斑ある椋鳥が、ストーブの上から不思議な疑深い眼で私を見て居る。

『それぢや、阿母、水がありますか』と私は聲をあげて問ふた。

『ありますよ、其の桶の中に』と婆さんは顎で桶を差した。

水の味は泥澤を思ひ出させた。婆さんにお禮を云ふと、婆さんは一向氣にも留めない、私は大道に出る路を尋ねた。

婆さんは急に頭をもたげて、其の寒い鳥見た様な眼で熟々私を見て愴惶ながら謔いた。

『去ね、去ねー去ね、ねえ、勝手に去ね。茲に用は無いのよ。紙鳶が出てる時には雌鳥が氣を附けねばならぬ。去んでお呉れ、旦那、去んでお呉れ』

何も別に理があつたと云ふのでは無いらしい。只立ち去れと云ふのだつたらう。けれども此の嚴しい巫女を少しでも和げて見ようと云ふ考へが私の頭に浮んだ。で私はポケットから二十錢銀貨をとり出してマスイリカに差し出した。事は誤らなかつた。金を見ると婆さんは動き出して、目をジツト大きく開け、拗れた節だらけの顫へる指で貨幣をとらうとした。

『あはあ、待つた阿母。只ではあげられない』と私は諸謔て貨幣をかくしながら云つた。『さあ私の運を見てお呉れ』

婆さんは、黄褐色の皺だらけの顔を不満相に盛めた。婆さんは屹度、躊躇して居つたのだ。そして何うしたら良からうかと云ふ風に金のかくれた私の手を眺めた。けれども怒には追つかぬ。

『宜しゅう御座います〜、判断してあげませう』と辛と床から起ち上つて嘎聲で云つた。『私はもう運氣見が出来ない。私は年をとつて……忘れてしまつた。そしてどうも眼が見えないで。けれ共旦那の爲なら、どうやら出来ませう』壁に寄りすがつて、婆さんの曲つた身體は一步一步慄へながらテーブルに近づいて来た。すると、古びて赤褐色に膨れた札を取り出し、其れをゴチャ雑せにして私に渡した。

『さあ、抽きなされ、真中から、左の手で抽きなされ』
指に唾氣して婆さんは包を擴げ初めた。札は糊の流れ落つる様な音をたて、落

ちると八つの光りある星形になつた。最後の札が裏返しに王の繪の上に落つるとマヌイリカは私に手を指しのべた。

『さあお拂ひなさい。旦那さん。貴方は運がい、一金持ちになりますよ。』
私は婆さんに約束の金を與へた。婆さんは素早く猿の様に其れを頬張つた。

それから『長い旅の後に大變運のいゝ事がありますよ』と婆さんは早調子で教へて呉れた『金剛石の女王に會つて、大きな家の中で楽しい話も出来ます。間も無くクラブの王様から存じがけぬ知らせを受けます。何か心配事も起るけれど、金が澤山どれる。大きな社會へも這入られる。酒も飲める。永生をされる。もし六十で死なれなかつたらばー』

急に婆さんは話を止めて、頭をあげ何かにジツト耳傾けた。

すると清新な律呂のほがらかな女の歌ふ聲が段々小屋へと近づいて来る。それ

は楽しい露國の歌であつた。

『ゲルタローズの花を萎まする、

あゝ日よ、いたすらな日よ。

人をば休息に沈まする

あゝ眠よ、いたすらな眠よ』

『お歸り、さああなたは、もうお歸り下さい』と婆さんは只ならぬ調子で、私をテールからおし除けた。『あなたは他人の小屋の内に這入る権利がありません。さつさともとの處へ歸つて下さい』

遂に婆さんは私のジャケットの袖を捉えて私を出口へ引つ張り出した。其の顔は野獸見た様な不穩を現はした。

歌を唄へる聲は直ぐ小屋の眞近くに響いて來た。鐵の鑢が音高くガタ／＼なつ

た。戸がガラリと開かつた。すると入口に丈の高い笑顔のよい乙女が立つて居る。乙女は兩方の手で雑色の前垂を保つて居るが、其の前垂から赤い首とピカ／＼光る黒眼を持つた三羽の小鳥の頭がキヨロリと出して居る。

『お母さん、御覽よ蠟が復來しましたよ』と笑聲高らかに乙女が云ふ『御覽よ、可愛いぢやありませんか、飢えて居るんですよ、私が態ど何もやらなかつたもんですから』

けれ共私を見ると其の乙女は忽ち沈黙して顔を眞赤にした。其の優しい黒い眉毛が吾知らず動いて、其の眼はいぶかしげに婆さんに轉じた。

『そのお方はね、道に迷ひなかつたんだよ』と婆さんは説明し、

『旦那さん！』と此度はてきぱきとした目で私に向つた、『もうお涼しくなつたでせう。水で氣も生々したのでせう。お頼みも終へました。それぢやもうお歸り下

さい。私共と那方は世間が違ひますから……」

「お嬢さん、一寸」と私は娘に問ひかけた。「どうか、私にイリノブスキーへ出る路を教へて下さいませんか。一體貴嬢方は一生涯この澤にお住ひなさるのですか？」

優しい丁寧な調子で云つたのが反應したのか、乙女はストーブの上の椋鳥の側に、鷺を丁寧に置いて、已に脱いで居た短かい上着をベンチの上に投げ、やをら小屋から出て行く。

私は乙女について出た。「鳥は皆貴嬢になれますか？」と私は追ひついて尋ねてみた。

「よくなれますよ？」と女は突然ふり向きもしないで答へ「あれ、一寸彼處を御覧なさい」と生垣のもとに立ち止つて云つた。「小さな路が見えるでせう。あの松

の蔭にね。見えますか？」

「見えます……」

「それを真直行らつしやい。してね檜の株のどこへお着きなさつたら左へ曲つて、森を真直お脱けなさるのですよ。すると直ぐイリノブスキーの大路に出ます」

女が右手で道の方向を私に指差した時、私はあまり彼女の美しさに見とれ無いでは居れなかつた。彼女は少しも田舎娘らしくは無い。田舎娘といへば額の上や口顎の下を見苦しい紐で蔽ふて變化の無い厭な表情をして居るが、彼女には少つとも其う云ふ處が無い。

けれ共、二十から二十五歳までの間で顔はほんのりと赤味を帯び、髪は黒々とした丈の高い私の未知なる此の乙女は快活で健か相にして居る。其の廣い白の着

物が若い健康な胸に自由に優しくまつはつて居る。

彼女を一見したばかりで、とても其の顔の單純美を忘れる事は出来ぬが、さらばとて、よく其れを描寫する事も出来ない。

機敏と力と天真爛漫の影見ゆる、其の大きな輝く黒眼と、其の美しい秀でた眉と、其の皮膚の茫んやりと神秘を帯びた薔薇色と、兩唇の氣儘な彎曲と、決心と幻想の情をほめかした下唇に、何とも云へぬ恍つとりとして人を迷はすものがあつた。

「貴嬢、這麼淋しい處にお住ひになつて怖くはありませんか？」と私は生垣に立停つて尋ねて見た。

女は床しげに肩を動かした。

「何が怖いものですか？ 狼は來ないんですよ！」

「だつて、狼ばかりぢや無い……雪に閉ぢ込められるかも知れないし、……森火事に會ふやら分らないし……又他に何事が起らうとも限つたものぢやありません。貴嬢只お一人では誰も貴嬢に結婚の申込をする人さへ無いぢやありませんか？」

「まあ其れが有り難い事ですよ」と乙女は輕蔑様に云つた。人が顧みて呉れなければ呉れない程結構ですわ、そしてね——」

「何故ですか？」

「どうして其麼事をお尋ね遊ばすの……」と女は簡單な應へて、「那方は何と被仰る方ですか？」と憂ひがましく續けた。

私は多分婆さんと此の若い美人は權官の壓制を懼れて居るのではあるまいかと疑つて、彼女に復急いで安心させようと思つた。

『いや、何も御心配下さるな。私は警官でも、坊主でも、收税官でもありません。兎に角私は全々官吏といふものではないのです』

『そう？本當に？』

『眞面目に云つてるのですよ。私は全く旅の者です。誓つて申上げて置きます。私はね、只數ヶ月をと思つて當地へまいりました者です。今數ヶ月経てば歸ります。お望みでしたら、私は茲へ來て貴嬢にお逢した事を誰にも話しますまい。貴嬢は私を信じて下さるでせうね？』

乙女の顔は稍輝いた。

『はい、那方が嘘を被仰るのでありませんでしたら信じますよ。ですが、那方はいつぞや私共の事をお聞きになつたでせう？でなければ偶然いらつしたので御座いますか？』

『そうですね、それはまあ、何うお答へしてよいか分らないですが。そうですね、噂だけは聞いて居ましたよ！けれ共尋ね出して見ようなんか少つとも思はず、今日は全く偶然な事でした。道に迷つたもんですから。處で貴嬢は何故人を怖がりなさるのですか？人々が何か貴嬢方に悪い事でもしたのですか？』

乙女は疑はしい目附で私を見た。けれ共私は良心に責められず、又逡巡せず、女の穿鑿がましいい瞳を見返へしてやつた。

すると乙女は猶更胸騒がして續けた。

『人が私共に激い事をしましたのです……普通の人民はよいのですけれど、警官が警官が賄賂をやりましますもの――巡査の代人までが。皆が吾劣らず賄賂を持つて來て、祖母さんを騙します』

『でも其麼人達が貴嬢に何かするのですか？』と私は何氣無く問ふた。

乙女は頭を後ろにやつて、高ぶつたる様をほのめかし、その細めた眼を喜びと怨恨に輝かした。

『何も致しませぬ……でも或時何處かの測量師がね、可笑かつたんですよ……私を愛しようどしますもの。此の頃だつてまだ其の人は私を忘れては居りませぬ。』
是等の冷然たる諷刺的で、怪しい程大膽な言葉は、私が吾知らず『お前がボラサの森の中に育つたのは無理も無い事だ。お前の様な者と巫戯て居るとおつかない』と思つた程、氣儘獨尊に聞えた。

『そしてね、私共は誰とでも衝突致しますもの』と段々厚く私を信用すると云ふ様に語り續ける。『私共は人と何の彼のど關係したくはありませぬ。僅一年に一度私は麥の粉と鹽を求めに町に行ります。其れからね、祖母さんの爲茶も買つて來ります。祖母さんは私と只二人つきりで、お茶あがるのが楽しみです。私は誰も見

ないからとて少しも淋しくは御座いません』

『あ、どうですか？成程、貴嬢も祖母さんも交際をお好きなさらないのですね。でも私は何時か一寸復お尋ね申したいと思ひます』

乙女は笑ひ出したが、此はそも如何に其の美しい顔は變つて仕舞つた。以前の角張つた處が少つとも無くなつて、忽ち新しい、嬉々とした子供の様になつた。

『でも、何の御用でいらつしやるのですか？祖母さんも、私も人間では御座いませんのよ。しかしね、お好みでしたらいらして下さいまし。もでね、願が御座います……いらつしやる時には鐵砲をお持ちにならないで下さいませ。』

『鐵砲が怖いのですか？』と私は尋ねた。

『何が怖いのですか？私何も怖いものはございません。』
其の聲には、吾が力を信ずるといふ様な響があつた。

『怖くはありませんが、好かないのです。何故那方は可愛い鳥や兎をお殺しに
なりますか？ 誰にも害は及ぼさないで、お互御同様に生活を喜んで居りますもの
を！ 私は鳥や兎が可愛くてなりません……左様なら……』と云つて、又どり急ぎ、
『私はまだお名を存じませぬが……もう祖母さんが小言を云ひますから、これで
失禮致しませう。』

斯う云つて乙女はそよ風の様に小屋の方へ走つて行く。髪がさらさらくと風に靡
くから、頭をうつむけて居る。

『一寸、一寸』と私は呼びどめた。『貴嬢は何と仰しやるの？ お互に名を知つて居
たがいでせう。』

乙女は一寸立止まつて振り向いた。

『私の名はヘレンです……でも人はオレシアと申します。』

私は銃を肩にして教へられた方へと迎つた。小丘を攀づれば一條の徑路が覺束
なげに見えて居る。私は顧みた。オレシアの赤いシャツが微風に軽く動いて小屋
の入口に見えて居た。雪の面より眞白な、美しい人がジツトイんで居るのだ。

私に一時間ばかり遅れて、エルモラは歸つて來た。無駄な話を好まぬ處から、
彼は一言も何うして何處へ迷つたかとは問はないで、

『御覽なさい……臺處に兎を持って來ました。料理しませうか、人に送りませ
うか？』

『おいエルモラ、俺が今日行つた處を知つてるか？』と私は森の男の驚きを前知
して云つた。

『何うして分らない事がありますか？』エルモラは澁い面して謔いだ。『巫女の處
に行かれたでせう？』

『何うして知つたのか？』

『分らない事がありますものか？私は旦那様の聲が聞え無くなりましたから、足跡を追ふて廻りました。あ、旦那様』と彼は悲しげにされど侮辱的に『旦那様は彼塵人間と交際してはよくねえなあ！』

四

春はボラサにて何時もの如く、思ひ掛け無くも早々に音づれた。細い流れは忙がはしく、濁り勝に輝いて、石にせかれては咿々然と怪た々ましく囁いで、鉤屑や、鳥の羽根を渦巻き、急に急にと村々町々へ流れ下つた。大きな水の淀みには、帆走り行く眞白い羊毛の様な雲を浮べた紺青の空が映じた。屋根々々からは雪消けの雫がバチャリ〜と落ちた。

雀の群は、路傍の柳を蔽ふて、もう何にも他に物音の聞えない程八釜しく囁つた。何處にも生命の悦ばしく忙がしげに走り廻る豫想を感じられた。

雪は、猶谷々や森蔭に汚れて孔多い塊になつて、残つて居たけれ共、早消えかゝつて居た。其の下から、眞裸體の打濕つた土が、冬になつて蘇生し、今やみづ〜しい汁に充され、母たるの新しい望みに充されつゝ覗いて居る。

黒い野の面には陽炎もえて、融けた地の嗅が空に漲つて居る——それは町でも百色陸離の間に認めらるべき、新しい強烈な何でも彼でも透徹せずには居ないぞと云はむばかりの駭蕩なる春の臭ひだ。殆ら私には此の複郁たる香と共になづかしく痛ましい春の悲哀を心の中に注ぎ込まれる様な氣がした。そうだ、絶之間無い憧憬と混乱の前兆と、人目に凡ての婦人を美化する詩的悲哀に充された、されど何時もあへなく逝く、定かならぬ春の嘆きといふ様な香を帯びた悲哀である。

夜は段々と暖かふなつた。夜の重く打濕つた闇の中には目には見えねど、自然の壓迫する様な生の力が感ぜられた。

春の今日此の頃、オレシアの姿は片時も私の目の前を離れなかつた。

一人居る時、眼を閉ちて身を横へ、猶好んで思想を聚め心行くばかり彼女の表情を追回するのは私にとつての心やりであつた。嚴肅になつたり、鋭くなつたり、さては優しい微笑でふうわりとなつたりする其の顔よ。爵翁とした森の自由に育てられて、若い樅の木太るが様に調和して、しかも健かに成長したる其の若い姿よ。思ひ掛けない低い柔らかな調子を帯びた其の清新な聲よ！

『その乙女の全舉動と凡ての言葉には』と私は考へた『兎にも角にも何だか高尚に養育されたものがある。最も明様に普通の言葉を假りて云は、天賦の美德と純潔とがある』

又私をオレシアに引附たものは、其の住家をめぐる暈の様なものと、老巫女に關する迷信の評判と、澤を廻る森中の乙女の生活と、更にきわ立つては僅數言の内、内に明に私と相替された彼女自身の力ある高慢な自信とであつた。

だから森の路が稍乾くを待つて、私が彼の小屋へと出掛けたのは怪しむべき事では無い。若し不満の婆さんを慰むる必要でもあつたらと思つて、茶半斤と砂糖の塊少しとをお土産に携へた。家には二人共居つた。婆さんはボン／＼と盛んに燃ゆる爐の側にウヨ／＼動いて居た。オレシアは素敵に高いベンチに腰掛けて亞麻を紡いで居た。私が戸を叩いて這入ると絲は乙女の手から滑り落ちた。

婆さんは爐の熱さに手で顔を蔽ふて打撃めながら、怖い目で暫らく私を見た。『祖母さん如何です？』と私は高い確乎した聲で尋ねた。『多分御記憶がないでせう。お覺えがご座いますか？私は前の月、路をお尋ねにまいりました。貴女は又』

私の運命をも教へて下さいました。』

『私は其麼事覺えませぬ、』と婆さんは頭を振つて蛙の様な聲で云つた。『私は、少つとも覺えが無い。そして、旦那が残して下さつたものも何だか知りません。一體私共を何とお考へなさるのですか？私共は何でもない愚な田舎ものですから並の事なら御用は無用無用です。森は大きいし、お互様の間も離れて居る事ですから——』

此の親しからぬ待遇にほご／＼私は途方に暮れ、人が何うしていゝやら分らぬぬ時に演ずる可笑な様を演じ、お道氣で無作法に立ち去つていゝのか、怒つて引き返していゝものか、或は又一言も云はないで戻つたものであるか分らなかつた。吾知らず私は頼り無い表情でオレシヤの方を向いた。するとオレシヤは軽くほゝ笑むで、可笑しいども嬉しいと云へぬ面持で木綿車を止して老婆に近づいた。

『祖母さん怖かありませんよ。此の方は悪い方では無いの。何も悪事なんかなさらないですよ。御深切にお掛けなさいつて仰つしやいよ』ともう、ズブ／＼云つてる祖母さんはそち除けにして、オレシヤは戸の近くの隅にある腰掛を私に奨めた。

乙女の丁寧なのに勵まされ、私はうまく計書を示さうと決心した。

『何故祖母さんは怒なされるのですか？粗末なものです、貴女にお土産を持つてまいりましたよ』とて私は袋から包をとり出した。

婆さんは包を一寸見たが直ぐ爐に向き直つた。

『私は何もお前さんのお土産なんぞ貰いませぬ』と婆さんは火搔で炭をいきなりに搔きたてた……『お前さんの様なお客さんはいくとも知つてる。初めは諂媚つて後には……。袋の中には何を持って來ましたか？』と急に私の方を向いた。

私は直ちに茶と砂糖をとお婆さんに渡した。すると之は婆巫女を慰める感化力を持つて居た。婆さんは猶づづ／＼云つては居つたが以前の様に毒々しい調子では無くなつた。

オレシヤは再び紡ぎ初めたが私は其の近くの短かい低いユラつく小つぼけなべンチに腰掛けた。

オレシヤは左の手で絹の様に柔らかい亞麻絲をくる／＼と廻し、右の手ではブ／＼と静かに紡糸を使ひ、今將に地に落ちようとする處を再び手先輕妙に捉えてグル／＼と廻す。此の仕事、初め一寸見た處では極めて單純な様だが實は仲々の熟練を要する事で、只オレシヤの手では其が單純にブ／＼廻つた。

不圖私は其の手に氣が附いた。其手は仕事の勢で強まり、又變色はして居たが高尙な躰ある處女が羨ましがる程細くて奇麗であつた。『那方、祖母さんが運命を

見て呉れました事を少つともお話なさいませんでしたのね』とオレシヤが云つた。私が氣遣しげに振り返つたのに氣附くと彼女は復斯う云ふ『かまいませんよ。祖母さんは耳が遠くて分りはしませぬ。私の聲ばかりはよく聞き分けますけれど』

『見て貰ひましたよ。でも其を何と仰しやるのですか？』

『お、私只聞いて見ましたまでの事なんですよ。那方は其を信じなさいませぬの？』とて女は一寸秘かに私を瞥見した。

『信するつて何をです？祖母さんの豫言なかつた事ですか、又は其の他の事ですか？』

『別な事ではありません。』

『さて／＼何う云つたらよいでせう？そうです、まあ信せぬと云つたがよいでせ

う、併し信じようと信ぜまいと、何うして其麼事が前から分りますものか？一體
死師は理由があつて云々と申しますか……學者の本にも其麼事が書いてありま
す。然しね、祖母さんの仰しやつた事に關しては私少とも信じませぬ。田舎の婆
さん達に其麼事云ふのはいくらも有ります。』

オレシヤは笑つた。

『そうですよ。祖母さんは豫言が大變下手になつた事は確かなんですよ。年を
どつてね大變臆病になりましたものですから。でもお札には何と書いてありまし
た？』

『別に面白い事でもありません。憶えても居ませんがね。長旅とか、損とか益と
か云ふ様な事が書いてありました、が其の外は憶えませぬ』

『そうですよ、祖母さんは下手になつて仕舞つたのですよ。年とつたもんですか

ら、澤山の言葉を忘れましたんです。無理も無い事ですわ。それに祖母さんは豫
言することを怖がりますもの。』

『何が怖いのですか？』

『官吏です。巡査が来て何時も祖母さんを嚇かします。斯う云ふんですよ、終身
獄に入れるぞとか、お前の兄が巫術をやつて獄に入れられた事を知らないか？—
—生涯の流刑だつたぞ。お前もサガレン島に刑の服役をさせるぞなど、申しま
す。那方何うお考へなさるの？流刑に處せられるつて、本當でせうか？其ども嘘
でせうか？』

『そうですね、嘘だと斷言はされませんね……實際から云へば、其ういふ罪はあ
るのです。でも大した罪ではありません……それはまあ其れとしてオレシヤさん
貴嬢は、運命をご覧なさいますか？』

オレシヤは稍躊躇したが暫らくして『え、見ます……でもね、お金なんか頂くんぢやありませんよ?』と急いで加へた。

『多分貴嬢は札で運命を判断なさるでせう?』

『否、』と優しく明瞭と答へてオレシヤは顔を振る。

『何故札を用ひなさらないのですか? 今でなくてもよいから何卒見て下さい。何だか當り相な氣がしますから……』

『厭です、見てあげません。どんな事があつてもあなたの運命をあてるのは厭です。』

『其はいけません。初めてお願いするのですから、見て下さらなければいけません。何故厭だと仰しやるのですか?』

『だつて、私はもう那方の爲に札をくつて見ましたもの。二度と繰り返へしては

しません。』

『何故? そんな事があるものですか?』

『いゝえいけません』と彼女は迷信的恐怖をほめかして云ふ、『運命といふものは動かしてなりません。動かそうとしても、運命の女神は動かしません!』

私はオレシヤに戯れて答へようとしたが、出来なかつた。彼女が運命に就て語つた其の言葉の中には、實に偉大な、眞實な、罪の宣告と云ふ様なものがあつて、彼女は本能的の恐怖に驅られつゝ、扉の方を瞥見した。私は機械的に其の舉動を眞似した。

『宜しい! 見て下さらなければ、先に見られたのを話して下さい』と私は願つた。オレシヤは突然絲卷竿を投げ棄て、私の手をとつた。

『いゝえ、申上ない方が宜御座います』と彼女は云つたが、其の眼は優しい情を

表はして居た、『何卒お尋ねなさらなさいで下さい。あまりよい談ではありませんから……』

然し、其でもよいから云つて呉れど私は迫つた。一向何の事やら分らなかつたからである。オレシヤの拒絶と、暗黒な暗示は單に運命論者の實の無い工夫に過ぎないのか？或は何等かの眞實が含まつて居るのか……私は何だか淡氣味が悪くなつて仕舞つた。

『い、でせう。お聞になりたければ申上りますよ』とオレシヤは遂に諾した。『でもね、有の儘を申上りますから、若しお氣にめさなない事がありましたら、御免下さいね。お怒り遊ばしてはいけませんよ。斯うですよ……那方は善い方ですが、弱い方です……那方の品性は強くない、眞實でも無い。一言で申しますと、那方は那方御自身の意志を持つては居られません。那方はよく人を愛しなされるけれど、思

つた通りになさる事が出来ません……、其から又那方はお酒が好いですね……岐度そうでせう？順序正しく申しますとね、那方は御自分の性質をお好きになつて居ますが、その爲に一生涯大變な災が起きてまいります……那方は金を尊びなされないから、従つて貯へも出来ませぬ……那方はお金持にはなれません。まだ申上てよろしゅう御座いますか？』

『さあ、何卒！何でも彼でも仰しやつて下さい。』
『其からね、那方の一生は幸福ではないと示されました。那方は心の冷めたい方で、遅い方だから、全心を捧げて誰をも愛しなさらないので。那方は、那方を愛する人に大なる悲劇を興へなさいます。那方には決して婚縁が無く、孤獨で死くなられます。那方は餘りお樂が無く、色なご心配と重荷とで一生涯が終ります。』

那方には自殺したいといふ時が来ますよ……這麼場合がきつと一度は起ります……けれ共勇氣が足り無いので、那方は死をも決しなならないで、辛棒なさいます……那方は大變御忍耐ならなければなりません、でもね、御一生の終りに近づくと、那方の運命は變ります。先にお話し申した人が死にますと、思ひ掛け無い事になります。此は何年もく後の事でご座いますが、今年のが茲に僅一つご座います……何時だかよくは分りませんが札には直ぐだと書いてありました。或は今月の中に起る事かも知れません……」

『今年何事が起るといふんですか？』と私は彼女が黙止込むのを見て尋ねた。

『もう恐くて此の上は申せません。何とか云ふクラブの女王が那方を大變戀します。私はね、其の女が縁附て居るのだから獨身で居るのだからは知りませんが只其の女の髪の黒いことだけは知つて居ます。』

私は思はずオレシヤの頭を一瞥した。

『何をご覧なさいますか？』と彼女は、本能的に何ものをか認め、私の瞥見を恐れてか直に顔を赤らめた。『そうですよ、私の髪の様だね』と彼女は機械的に自分の髪を掻き上げて微笑みながら續けた。

『それでは其の戀愛が何うなるか豫言して下さい』と私は戯れて云つた。

『戯談ちやご座いませんよ』とオレシヤは嚴かに云ふ。『私は嘘なんか決して申上ません！』

『よろし。笑ひません。だからもつと其の先をお話し下さい！』

『もつとですか？あゝ！萬事此のクラブの女王の爲めに那方は運が善くありません。ほんとに、死よりもつと激ひ事が起きます。那方故に其の女王は命のあらゆる限り忘れぬ恥辱にも會ひ……、そしてもつと激しい苦痛にも會ひます……』

でも女の方から何にも那方には害はまゐりません。

「其は札が違つてるのぢやありませんか？何故私はそのクラブの女王を其に害せねばならないでせう？私は眞面目な禮節ある男子なのに、這麼恐い事を豫言なさるとは。」

「それで御座いますね、私にも理は分かりません。でも那方は其の運命をお變へ遊ばす事が出来ます。然し其の運命はあなたに意志のあつて起るのでは御座いません。只那方故に起るので御座います。起つた後で初めて何故かといふことが初めてお解りになります。」

「札に其ういふ事が書いてあるのですか？」

オレシヤは稍躊躇して答へた。

「ゑゝ……でも私は只お顔を拜見した計で大部分分つて居ます。例へばね、

間も無く怖ろしい死を遂げようとして居る人を見ますと、直ぐ其の顔で分ります」

「其麼人の顔には何ういふことが書いてありますか？」

そんな事は解りませんが、何だか急に怖ろしく其の人が私の前に死んで立つて居るやうな氣がいたします。祖母さんに聞いてご覧なさいませ。一昨年水車屋のツロフィンが水車小屋で首くつて死にましたが、私は其れを二日前に見て、祖母さんにね、ご覧なさい、祖母さん一兩日の内にツロフィンが怖ろしい死を遂げますよ、と云つたんですよ。すると其の通りでした。去年のクリスマスの日に馬盗棒のヤコフが來まして祖母さんに運命を見て呉れと頼みましてね、戲氣で「祖母さん、私什麼死態をするでせうね、一つ教へて下さい」つて申しました……。

そしてヤコフはケラケラ笑ひ出しましたが、私は慄然して身動きも出来なくなり、ヤコフの外は何も見えなくなりました。それが可笑しいんですよーヤコフ

は座つて、其の顔は死人の様に眞青でね……眼は閉ぢて、唇は眞黒でした……
すると一週間の中に百姓達が四五匹の馬を盗み出さうとして居たヤコフを捉
えて終夜打つ叩たといふ事を聞きました。……當地の人民は鬼ですからねーほ
んどに同情も何も無くヤコフの足をくつて釘にぶら下げ、杖で肋骨をぶん擲
つたんです。翌朝になりますとヤコフは死んで仕舞ました。』

『貴嬢何故災の起る前ヤコフに其の事をお話しなさらなかつたのです？』

『云つても駄目ではありませんか？』とオレシヤが答へた『運命で定つた事は逃
れる事が出来ません？人は只空しく最後の日になつて自ら氣がつくのです。這麼
事が私に見えますのは怖くて、自分ながら厭になつてしまふんですが、何うし
ようつて仕方はご座いませぬ。運命がチャンと定まつて居るんですもの。私の
祖母さんも若い時、同じ様な事があり、お母さんも亦其うでした。其はね、私

共の血統ですもの。』

彼女は絲車を止めて座つたが、頭を垂れて、頼り無げに両手を膝の下に落した。
ジツト見すえた其の眼には、擴大した瞳子と共に、宿命の恐怖でも云ふべきも
のが輝いて居た。彼女の魂を影暗くする超自然の祕密なる力に服する神祕的な
服従どでも云ふべきものだ。

五

暫らくする程に、婆さんは縁のある奇麗な布をテーブルの上に敷いて、其の上
に湯氣だてる鐵瓶を置いた。

『さあお午お上り』と婆さんは孫娘に云つたが暫したためらつて私に向ひ『宜敷
ご座いましたら鄭那さん、一緒にお上りなさい、お免なさいね。私共はほんと

に何も持ちません。おいしいスープなんぞ少つともご座いませぬ、只麥汁ばかりです！』と云ふ。

其の云ひ振が際立つて深切だとは思へなかつたので、私は辭退せむとして居つたが、今度はオレシヤが何とも云へぬ程喜ばしく單純に、しかも美しい笑を湛えて笑めたので私は吾が意を曲げて應じた。

オレシヤは私にクループニク(蕎麥と肥つた洋葱、馬鈴薯、雛から取つたスープ)を皿一ぱい注いで呉れた。素敵にうまい慈養品だ。婆さんも孫娘も座に就く前十字を切らなかつた。

食事の間私は秘かに二人の女を觀察した。それは現に私が信じて居る如く人は食事の時程、其の性格を明かに表す事は無いと思つてゐるからだ。婆巫女はパンの大片を口に差し込み、萎んだ頬がビチャリトと響く程音高くムクムクとしては

スープを貪慾にもグツと飲み下した。

けれ共オレシヤには其の食事の仕方すら本能的の美くしい禮義があつた。

一時間ばかりして食事の後、私は小屋の婦人と別れた。

『お宜ろしゆう後坐いましたら少し先までお供致しませう』とオレシヤが申し出た。

『何と威氣た事を考へるのかい』と婆さんは腹立しげに唸つた。『さつさと仕事を

をするのだよ。餘計なお喋舌をするものぢや無いよ！』
けれ共オレシヤは赤いキアシユミヤ製のシヨールを頸に巻き付け、祖母さんに急ぎ寄り、抱き附いて接吻した。

『祖母さん、ねえ、ねえ……直ぐに歸つてまいりますよ。』

『それぢや行つてお出よ』と優しく、くり返して婆さんが云つた。『鄭那さん、

彼女を餘り激く責めなすつてはいけません、何にも分らない娘ですからね。」
狭い小徑を辿つて私共は泥黒い森路に來た。獸の足跡と車の轍の跡には水が溜つて夕日影が反射して居た。

去年の枯葉に蔽はれた路を通つた。葉は雪の下に乾いてまだ萎まないで居る。其處此處に大きなブリューベルが淡紫色の頭をもたげて居る。春が來てボラサに先づ咲く花だ。

「一寸、オレシヤさん」と私は口をきつた。私はね、怒られるかも知りませんが何か聞きたくつて堪まらないですがね……人は本當に貴嬢の祖母さんが……さて何う云つたらよからふ……？」

「巫女？」とオレシヤは取りあへず私に暗示して云つた。

「いゝえ……巫女ではなくて……」と私は口ごもる。

「でも巫女を―巫女をお好きでしたら其れでいゝです。兎も角巫女の云ふ様な事は大切な事ぢや無いのです。祖母さんは何故僅の食物や療法や魔術の外に知られないのです？お氣にさわつたら御免なさいね。」

「いゝえ、と乙女は單に答へた。「厭な事つてありますものか？そうですよ。祖母さんはほんとに巫女なんですよ。でも近頃は年とつて、以前によくやつた事がもう出來ないんですよ。」

「祖母さんのもとに什麼事をして居られましたか？」と私は好奇心に驅られて云つた。

「今やれない事をやつて居ました。祖母さんは病氣を癒したり、齒に注意してね、血に魔力をかけたたり、狂犬や蛇が人を咬むたら巫術で治したりしました。祖母さんはいろ／＼な事を澤山發見しました……今一々數へたてる事は出來ません」

『オレシヤさん甚だ失禮ですけれどもね、私は少つども其慶事を信じませぬ。私は決して貴嬢を裏切するものではありませんから、何卒打ちあけてお話し下さい。一體這慶事は皆人を愚弄する詐欺術といふべきものではありませんか？』
乙女は平靜に肩を聳した。

『ご勝手にお考へなさいまし。田舎の婆さんなんか欺すには何の困難もありませんが、那方を欺そうなどは存じませぬ。』

『それでは貴嬢は巫術を固く御信じなさるといふのですか？』

『信じてはいけないのですか？ 私共は産れながら巫術を知つて居るではありませんか？ 私には何事でも出来ますもの。』

『オレシヤさん、是は本當に面白い！何ぞ私に見せて下さる事は出来ませんか？』

『お望みでしたら何でもご覧に入れませう』と快諾した『只今御覧に入れたがよろしいのですか？』

『え、出来る事なら今がよいのです。』

『怖いことだとは思ひなさないの？』

『以ての外です。晩ならば怖れるかも知れませんが未だ日中ですもの。』

『はい宜しゆうご座います。お手を出しなさいまし。』

私は出した。オレシヤは私の上着の袖を急に裏返しカフスの飾卸鈕をはづし、一寸五分の小さなフィンランド製の小刀をポケットから出し皮の鞘から脱ぎだつた。

『何をなさるのですか？』と私は迷信的に慄然と恐怖を感じて云つた。

『直ぐご覧に入れますよ……那方怖かないつて仰しやつたでせう。』

「急ち乙女の手は微かに漸く認められる位動いて、私は手頭の動脈の打つ少し上の柔かい處に鋭い刃物の冷めたい磨觸を感じた。同時に血液が疵の全面からあふれて手にこぼれ、地にダラ／＼と落ちた。私はよくも、叫び出さないうで居れた。きつと私は眞蒼になつて居た事だろふ。」

『大丈夫ですよ』とレシヤは笑つて居る。

彼女は疵の眞上を緊と握り、顔を俯しあて、熱い息を私の皮膚に吹きかけつゝ、何かいそがわしく、謔ぎ初めた。再び身をもたげて其の指を放した時には、疵口には只赤い搔痕が残つて居たばかり。

『さあ如何でござりますか。これで充分で御座いますか？』と彼女は悪賢く笑ひ、小刀を隠して尋ねた『もつとご希望なさいますか？』

『もつと何かやつて下さい。出来ますならば其麼に怖く無いもので、又どうぞ

血の出ないのをお願致します。』

『何うしませうね』と彼女は考へて云つた『まあこれでもやつて見ませう。私の先になつて路をお歩きなさい……後を見ない様にしつかりお氣をつけて居て頂戴。』

『何か怖い事ではありませんか』と私は不快の驚きを感じ、不安な心を平氣な笑で隠そうとして尋ねた。

『いゝえ、其麼事は御座いません。行らして御覽なさいよ。』
私は後ろの方に、オレシヤの集中して居る凝視を感じ、これは面白いぞとて先になつて歩んだ。

「けれ共、私は二十歩ばかり進むと、忽ち平地に躓いてベチャリと倒れた。『さあ、お出でなさい！』とオレシヤは叫ぶ。」

『後を御覧になつてはいけません。何も御心配なさるような事はありませんから。』

私は其から復歩んで行つた。十歩ばかり行くと、大股に踏出した。

オレシヤは聲高く笑つて手を叩く。

『もう其で充分でせう？もう信じなさるでせうね？』

『何うなさつたのですか？』と私は着物に纏つく小枝やら、枯草を叩き落しながら、驚いた様にして、

『秘密な事ですか？』と問ふた。

『いえ、そうではありません。説明致しませう。でも御理解なさいますか知らん。什麼に説明したらよいのか、實は私にさへ少つとも解りませんもの……』
私は彼女を充分理解する事が出来なかつた。併し私の考にして、誤が無かつ

たら此の奇怪なる巧は斯ういふ事であつたらう。即ちオレシヤは一步一步私の後を歩みながら私を確乎と見て行く、と同時に什麼小さい事でも全舉動を私に真似ようとする、そして方便上彼女自身を私と一様にしようとするのだ。

這麼風にして暫らく行くと、オレシヤは私の少し前に、地から二尺ばかり差し出た木の枝があるといふ事を心に描き初むるが、私が此の想像的の枝に脚をうつ其の刹那、オレシヤは轉び真似すると、案に違はず私は轉ぶのに相違無い。其の後久しく經つて、私は博士シヤキニーが巫女を職とせるサルペリアの二人の患者(ヒステリーに苦しめる者)に試みた經驗を録したものを讀んだ時、オレシヤの此の不思議な業を想起した。

又私は、ありふれた佛蘭西の魔法使が、愛らしい森の巫女の演じたのと少つとも違はぬ業をやつて居るのを見て驚いた。

『もつと色々な事が出来きますよ』とオレシヤは自信ありげに云つた。『例へば、私は那方に懼れを感じさせる事が出来ます。』

『其はまた何の事ですか？』

『私がね、那方が懼ろしくなられます様に工夫する事が出来るといふのですよ。假りに、那方が或夜お室に一人居らつしやるとしますね、すると忽ち何の理由も無くつて大きな恐懼が那方に臨んでまいります。そして那方は戦慄なさつて後を御覧になる勇氣もなくなられます。其の結果、私には那方の居らつしやるお室が目の前に見えるのです。』

『はあ、其れはお氣易い事ですね』と私は進んで云つた。『貴嬢が窓ぎわに来て、戸をトン／＼叩いて何事か叫びなさるのでせう？』

『あら、いゝえ、私は其の時森に居ますのよ。小屋の外へも出ません。私は

只坐つて考へて居ます。街を通つて、お宅へ這入つて、戸を開けて、お室に這入ると云ふ事を考へる丈です。那方が何處でもよいですが、まあ、テーブルに就て居らつしやるとしますね……すると私が秘そりと那方の後に忍び寄つてまいります……那方にはそれが聞えないのです……さあ、すると私は手でお肩を捉えて段々強く強く強く壓え附けます、して始終那方を凝視して居ます……這麼にご覧なさい……』

彼女は優しい眉毛を忽ち顰めた。眼は威赫と誘惑する表情で私を確乎と見て居る。瞳は大きく生々となつた。

私はハット計り、誰の書いたのやら思ひ出さねごモスコウのツレチアコフスキ！美術品展覧會で見た事のある怪頭瘡貌の女のお怪化を思ひ出させられた。此の確乎と見つめた眼の下に超自然の慄然たるものがあつた。

『もういゝ、もういゝ、オレシヤさん、それでよい』私はわざと快活に云つた。
『貴嬢は笑つて居らつしやる時の方がよい。笑つてると優しい子供の様な表情になります。』

吾々は歩行を續けた。表情の力ど、珍らしく言葉の精練なるオレシヤの會話とは忽ち私を動かした。で私は云つた。

『オレシヤさん、貴嬢は私が貴嬢を不思議に思つてる事を知つて居られますか？ 貴嬢は誰にも見られないで森の中に育ちなさつた。貴嬢は兎角あまり讀書もしては居なさるまい……』

『私は讀書の知識なんか少つともありません。』

『そこで、益々不思議です……讀書の知識が無くつても貴嬢は大變よくお話なさつて、生れの貴族の御令嬢その儘です。何うして斯うおなりになつたのですか

教へて下さい？』

『私は皆祖母さんから教はつたのです。那方祖母さんを左様は思つて被居らないでせう。でもね、まあ、ほんとに祖母さん惻厚なんです！ 祖母さんはね、那方もつと親くおなりになつたら話してお聞かせ申しますでせうよ。祖母さん何でも知つて居ます。世間並の事でしたら。』

『祖母さんは大變お年寄りの様ですが、什麼ご血統で、以前何處にお住になつて居ました？』

質問はオレシヤに喜ばしからず見えた。彼女は逃避的に不愉快相に、そして暫らく躊躇して答へた。

『私存じません……祖母さん其塵事は少つとも教へて呉れませんもの、人が聞きますとね、忘れて、もう思ひ出せないと申します。私もう歸らなくてはなりません。』

ぬ。』とオレシヤは急いで云つた。『祖母さんが怒りますから。左様なら……御免下さいね……私まだお名前を存じませぬ。』

私は教へてやつた。

『イヴァン、テイモシイーさんですか？ほんとに非凡な名ですね。では左様なら、イヴァン、さん、お厭にならないで私共の宅へお遊びにお出下さいませぬ。』

私は、お別かれの爲手をとつた。そして乙女の強い可愛らしい手は強いなづかしい壓力で私の手に應へた。

六

其の日から私は屢々小屋を訪ふ客となつた、其處へ届けばオレシヤは何時も相變らず落附いて出迎へた。私はオレシヤが私を見て、先づ演ずる本能的動作で、

私の訪問が彼女を喜ばした事を何時も観察した。

婆巫女は未だしも初めの様に何をか諷いて居たが、何せよ、敵對の心も、感謝や疑の無い心も、又世に類無い孫娘に對する情をも、分明と現はさなかつた。

私ともたらした平和の土産も餘りよい影響を及ぼさなかつた。或時は暖かな手袋又或時はチャムの瓶か櫻ブランドの壘か。

オレシオは私が家路に就く時イリノブスキーの道遙に見送つて呉れた。靜かに語り合ふては共に心を知り合つた。

斯る折々には二人の間に何時も生々とした悦ばしい話が起つた。其の爲二人は覺えず自然の衝動で、靜かな森の境を出来る丈遅く迎つて道草しようとした。

イリノブスキーの道へ出ると、私は道の四五町も送り反して、別かれる前には松の枝の薫しい天張の下に立つて猶暫く話した。

私を迷はしたのは只オレシヤの美はしさばかりでは無く、其の凡ての響、自由、創造的の性質其の明瞭にして動かされぬ遺傳的信念のくつ附いた心、幼兒の様な、されど美人の有する巧みな媚ある無邪氣さだ。彼女は自分の明かると獨創の想像を喜ばせ、或は煩はした凡ての物に就て細々と少つとも飽かないで私に尋ねた。國々の事や、人種の事、自然の現象、地球萬有の組織、學者や大きな都會に就て。様々の事がオレシヤには不思議で荒誕で不可能だと見えたのだ。

けれど知己になる初めから、私は嚴肅な、誠實な、單純な調子をとつたのでオレシヤは私を充分に信じて呉れた。

或時はオレシヤに何を何う説明してよいやら分らず、又其の分らなくなるのが私の意志の中にあるのやら、女の兒見た様なオレシヤの心に纏はつて居る何物かの働きに依るのやら定めがつかないのでまごつきながら、彼女の熱心な問に答

へて『さあ、其れがです……私は何う説明してよいか分りませぬ。でお分りなさらう筈が無い』と私はよく逃れ口上を云ふたものだ。

するとオレシヤは急に、

『いゝえ、何卒々々。一生懸命になつて聞きますもの、何うかしてお話し下さいませ。分明し無い事でもいゝですから。』

彼女は巨大な比較や類別を無理にして呉れといふ。若し私が發表にまごつくものなら、雨の様に質問の矢を放つ。一言でも激しい困まつた質問の種子になるといふ始末になつた。

そして誠に彼女の柔軟な、されど潑刺な理解と清新な想像とは遂に私の術學的弱點に打勝つた。

私は彼女の境遇と教育、もつと正確に云へば婆の社會生活の缺乏を思ふて見る。

と、彼女の非凡な能力を坐ろに驚かすには居られなかつた。

或日私は偶然、ペトログラードに就て何かの話をした。オレシヤが面白がつて

「ペトログラードとは什麼處なんですか？ 小さな町ですか？」と尋ねると、私は

「否、小さな町では無い、露西亞で一番大きい都です。」と答へた。

「其處に？ 一番大きい都なんですか？ そしてもう他に其處大きい都は無いんですか？」

飾の無い彼女は私を監視した。

「そうです。其處には多くの國の主だつた官吏や、貴族の多くが住んで居て、建築は皆石で、木製なんぞ有りはしません。」

「それじやステバナよりもつと／＼大きいんですね？」とオレシヤは問ふ。

「そうです、少しは大きい様です。……五百倍位はね。其處にある一軒の家に

は何れにもステバナの全部の人口の倍は住んで居ます。」

「あらまあ、何うした家なんですか？」とオレシヤは殆ど驚いて尋ねた。

私は復比較を初めた。

「五階も六階も猶七階もあつて怖ろしい家ですよ。あの松の木をご覧下さい。」

「大變大きい松の木ですわ。」

「さあ、其の家が皆其れ程高くつて、頂上から底まで人が一ぱいですよ。其等の人々は籠の中の鳥の様に小さな室に住んで居て、一室に十人位は居るので、空氣が漸く足りるか足らないかといふ位です。其れから又別な人は低い處に住んで居ます、濕つた、うすら寒い地の下に。で其處人は年中室で日の光を見る事が出来ません。」

「ねえ、私什麼事があつても自分の森と那方がたの都とは代えられせぬわ」とオ

レシヤは頭を振つて云つた。「私はステパノに行く時でさへ、厭ですもの。人がドヤ／＼集つて叫んで威ますもの。で、もう内へ歸りたくつて堪まらなく、何も彼も打ちすて、後見もせず一目散に走りますのよ。神様は那方達を守つて下さるでせう。でも私は決して町には住みませぬ。」

「あゝ、でも貴嬢の婿さんが町の人だつたら何うしますか？」と私は微笑して尋ねた。

彼女の眉はひそんで其の鼻孔が微かに顫えた。

「何ですつて？」と彼女は蔑視む「私、婿さんなんか決していません。」

「今は其魔事仰しやつても、オレシヤさん。乙女は皆其う云つてるが皆結婚しますよ。暫らくすると、貴嬢は貴嬢を愛する誰かとお出なさいますでせうよ。すると貴嬢は其の方と町にお出でなさる位の事か、地の果にまでお出でなさるでせう。」

う。

「あゝ、いゝえ〜……御免下さい」とオレシヤは不同意の素振して云つた。

「何故這麼事を話しましたでせう？何卒もう止して下さいね。」

「まあ可笑しな事だオレシヤさん。貴嬢は本當に生涯決して男を戀しなさない考へですか？若い、美しい、健全な貴嬢が？若し感情が昂憤したら仲々制せられないものですよ。」

「でも、若し私が誰かを戀せねばならないなら」とオレシヤは眼を輝しつゝ、決然として答へた。「私は誰の許も求めません。」

「全く左様です。そして貴嬢は其の人と結婚なさるでせう」と私は戯れて答へた。

「那方其の人と教會で結婚せようつて被仰るでせう」とオレシヤが尋ねる。

「勿論です……坊さんが讀經臺の周圍へ貴嬢を連れて廻ると、謠を唄ふ人がイヤの勝歌を歌つて、貴嬢の頭に冠を置きます。」

オレシヤは目蓋を下げて厭だと云はむばかりに頭を振つて微笑した。「否、那方、私が斯う云つたらお厭ひなさいませうけれど、私共の先祖は誰も結婚した事が無いといふことですもの。私の母も、祖母さんも結婚したんぢやありません。教會に行く事は私共には禁物です。」

「巫女だからですか？」

「そうなんですよ」とオレシヤは靜かに嚴かに答へた。「私は生れた時から神様に魂を捧げて居ますのに何うして教會へまいる必要がありません？」

「オレシヤさん、貴嬢は自己を欺いていらつしやるのです、本當に。氣狂じみた、可笑な言を云はれるものではありませんよ。」

オレシヤの顔には宿命と、彼女の祕密な運命に従ふ憂暗な服従とでも云ふ様な、私の未だ見た事の無い、怖ろしい表情が再び表はれた。「いーえ、いーえ、那方はお解りにならないのですけれど、私は其う感じます、茲にありませぬもの」と彼女は胸に手を緊かとおしあてた。「心の中で其を感じますもの。私共の一族は皆、時の終まで呪はれて居ますのよ。まあ、考へて御覽なさいませ、私共を助ける人は神様で無くつて誰でせう。並々の人間に私共の仕ます様な事が出来るものだと思はれますか？私共の力は皆神様から來ます。」

私共の話は何時でも斯う云ふ風に、非凡な題意を一層先へと續くる事無くて終つてしまつた。

遂に私はオレシヤが理解する様な話の種子を無くして仕舞つた。私は空しく通俗的方法で催眠術とか、暗示とか、精神療法の教師とか、印度の苦行僧とか云ふ

ものに就て話した。其れから又彼女の経験を心理學的方法で説明を試みた。例へば血管の科學的壓力で容易になされる血迷の様な事だ。オレシヤは自己特獨の確信で私の解釋や説明に反對した。……『いゝですよ、何うでもいゝですよ。私は血迷の出来る範圍で仰つしやる事なら信じますよ』と反抗の激情に思はず聲をあげる。『でも其れ以外の事になりましたら何うして出来ますでせう？』

『本當に私の仕ます事は血迷に過ぎないんでせうか？お好みでしたら一日の中に私が二十日鼠を皆家から迷い出して御覽に入れませう。又お好みでしたら私が唯の水で激しい熱病を二日の内に治して上げませう。那方がたのお醫者達が見棄てたものでもよろしゆう御座います。其れがお好みで御座いませんでしたら、那方が或る特別な言葉をお忘れなさる様にやつて見ませうか。又夢を通譯して御覽に入れませうか？又、未來を豫言して御覽に入れませうか？』

斯ういふ争ひになると、オレシヤも私も遂には内心面白からず互に黙り込んだものである。或る事柄に依ると、オレシヤの不思議な技術は科學的に説明するこゝどが出来なかつた。オレシヤには自然のまゝに洩れ出づる自信があつたけれど、果してオレシヤにどれ丈の祕密があつたかは知らなかつた。それでもオレシヤには、古來全人類がまだいかに精確な科學を以てしても測る事の出来なかつた程の深い不思議な内的事實に達した靈智があつて、牢固不拔の自信で演ずるその業は、法外無法で、衆人は決して其の祕密を悟ることが出来ず、只々至高至尊なものとしてその一家に代々以心傳心で譲り渡されたものである。

其ういふ超科學的事實が話頭にのぼると、私共二人の間には面白からぬ議論が起つたが、それでも二人は益々親しみ合つて離れられなくなつた。

二人の間に愛の言葉は一度もかはされなかつたけれど、共に居るといふ事は私

共にどつて、のがれられない程切實な事となつた。そして屢々沈黙の間に私共の視線は思はずチラリと、出會する事があつた。私は、深く恥らつたオレシヤの頬に新しい血汐が漲つて、其の顫顫のかすかな静脈管は以前よりも際立つて早く跳ね上るのを認めめた。

其の頃エルモラと私との關係は全く絶えた。

私がオレシヤの家を訪問したり、オレシヤと夕の散策を試みたりするのは公然で、エルモラに對しては少しも秘密で無かつた。でエルモラは何時も、此の森で起つた事は驚く程正確に知つて居た。

そういふ事で、私はエルモラが私を遠ざからうとして居るのに氣附いた。私が森へ出かけようとする時に、彼は何といふ反抗的な言としては少しも洩さなかつたが、輕蔑む様に、又不愉快相に私を見て居た。

學問に對する半嚴半戯の注意も彼には見えなかつた。私が時々稽古にエルモラを呼ぶ事でもあると、彼は只手を振るばかりだつた。

『何故です？ やつても、ごうせ役には立ちませぬ』と彼は眠むたげに輕蔑で云ふのが慣になつた。

彼は又獵に出かける事も止して仕舞つた。何彼につけて私が口を出すど、何時でもエルモラは逃れ口上を吐いた。或時は鐵砲が破損したとか、又或時は犬が病氣だとか、或は自分が忙がしくてならぬとか逃れ口上を云ふ。

『旦那、今日は隙がありません。私は田を耕さなけりやなりません』とは私が招く毎に彼がよく答ゆる言葉であつたが、それでも彼は田を耕さないで、終日、人々の集まつて来る居酒屋で暮して居るのを確に私は見届けた。

私は此の秘密な敵意を厭に思つた。だから私は、彼が嘘でも云つたものなら、

其れを機會に、彼に暇をやるふと考へた。只それを實行し兼ねたわけは彼の貧しい家族を思ふ同情の念があるからであつた。エルモラが六圓の賃錢は辛くも不幸と飢えどから彼の家族を救ふて居たのである。

七

或る日のこと、私は何時もの通り、夕刻になつて小屋に行くど婆さんとオレシヤが痛く心配して居るのに氣附いた。婆さんは床の上に坐つて俯向き、兩手で頭をおさへて前後に身を動かしながら何か秘かに謔やいで居た。そして私の來たのを少つとも知らない様だ。オレシヤは何時もの様に深切に私を迎えたが、話には少ども力が無かつた。只茫然やりと私に耳傾けて稀に答へるばかり。其の美しい顔には無限の新しい悲痛とても云つた様な影が漂ふて居た。

『何事が起りましたね』と私はベンチの上に横になつて居たオレシヤの手に優しく觸れて云つた。オレシヤは何物を見つる様な風情で窓に向つた。冷靜にしようとするのだらうが眉は動き且つ顫え、齒は其の下唇の上に堅く閉ぢて居る。『さ、え、例の通りで何事もありません？』と彼女は息づまつた様な聲で云つた。『何時もの通りなんですよ。』

『オレシヤさん、貴嬢は何故嘘を云はれます？嘘はよくありません。お互に親しいお友達ぢやありませんか？』

『だつて本當なんですもの。何事も無かつたのです……只少し心配して居るばかりなんです。』

『いや、オレシヤさん、少し位ではありますよ。貴嬢は何時ものオレシヤさんではありません。』

『只、そう那方に見る迄の事でせう。』

『偽らないで下さい。オレシヤさん。私はお助け申す事が出来るか、出来ぬかは知りませんが御忠告位少なくとも出来るでせう。そして貴嬢の悲を私に配けて下さつたら、貴嬢の重荷が減るわけでせう。』

『あゝ、私、お話ししても仕方が無いですもの、本當に』とオレシヤは耐えられずに答へた。『那方はとても助けて下さる事は出来ませぬ。』

婆さんは何時にも似ぬ優しさで忽ち私共の對話に加はつた。

『お前何故其處に高ぶるのかい？ご深切に話して下さるのに、輕蔑だりなんか、おかしな見だよ』と云つて、又私に向ひ、

『那方の様に惻厚な方は世界に一人だつてありません。誰でも左様思うでせうお好みでしたら、委しく此の話の一部始終をお話申しませう』と云ふ。

此の災の甚だしさは、オレシヤの言葉から考へたよりは、もつと〜大きかつた。

日暮前、地方の警官が馬に乗つて此の小屋に來たのだつた。

『最初、警官は、相當な挨拶をして腰掛けると酒を要求しました』と婆さんは語り出す。『そして斯う申します、お前達は片づけて仕舞へ。二十四時間の内に皆持物をもつて此の小屋から出て行つて仕舞へ。若し俺が復來る迄居つたら、承知しろ、お前達は獄に投られるぞ。俺が送りやるのだといふんですよ。二人の兵卒に監視させて産れの土地に送りやるといふのです。私の産れは遠い遠いアムチエンスクの町です。そして、もう其處には知己も無く、歸らうとしたつて通行券は期限を越して駄目ですもの。あゝ、神様、困まつた事でございます』

『何故今迄茲に住む事を許して、今になつて出て行けど云ふんでせう？』と私は

問ふた。

「まあ、斯ういふわけですよ。あのね、以前も這麼事を八釜しく云はれたのですが、何故か分らなかつたんです。今住んで居ます家は手前ので無くつて地主のです。是前オレシヤと住んで居ました時はね—」

「知つてますよ、知つてますよ、祖母さん、私は其の事を聞きました。百姓が怒つて居ました」

「はあ、其うでせう。其の時にね、地主のアプロシイモフから此の小屋を借りました。處が今は新しい地主が森を買つて居るとかで澤を流し出したと云ふ相です。何うして拒むだらうでせう？」

「祖母さん、其れ丈の事ですか？」と私は云つた「それでは、警官が賄賂を慾しがつて居るのですね？」

「其れはやつて見たんですが、取らないのです。本當なんですよ。貳拾五圓札を出しましたけれ共取りません。何うしたものでせうね？其の男、まあ、相手にならぬ程の悪者でした。私は其の男と論争しましたが—駄目なんです。仕様が無い、何うしたらいいでせう？ご深切な旦那さま、お助け下さりますならば鑿く事知らぬ貪慾奴を説き伏せて下さいませんか。一生涯感謝致しますが。」

するとオレシヤは、祖母さんを輕蔑様に、

「あゝ、祖母さん何ですつて？」と云ふ。婆さんは鼻息荒く「あゝ私はお前の祖母さんだよ、二十年もお前の祖母さんだよ。何をいつてるの？乞食にでもなつて出て行つたがいゝと云ふのかへ？いやいけない、旦那さんお聞き下さるな。何ぞお出来なさる事を私共の爲にして下さつたら、其れよりご深切な事はありません」私は漠然と出来る丈の事をしようとして約束をしたが、實際を云へば望が無つた。

若し警官が賄賂を拒むだとするれば嚴格な事情に違ひ無い。

其の晩オレシヤは冷かに私と別れ、何時にも似ず、見送つても來なかつた。

私は此の高慢な娘が私との關係を快からず思ひ、自分の祖母さんの弱味を稍恥ぢて居たのだと見受けた。

八

鈍よりとした生暑い朝であつた。已に幾度かダダとどあわたしい雨が降つた。暫らくではあつたが激しい雨ぶり、今や將に若草が萌え出て、新しい芽ばえがさしてゐる。

雨が止むと、日が暫し差し出で、其の嬉々とした光は、殆ど小廣い庭一ぱいに充され、スタリ／＼雨滴のしたゝる紫丁香花の若やかな新らしい縁に漲きつた。

雀の瘤高い八釜しい聲が濕味を含んだ園の床に起つた。白楊の粘ちやつく褐色の蕾は其の強い薫りを放つた。

私はテーブルに就いて森の住宅の圖引をして居ると、エルモラが室に這入つて來た。

『警官がお出になりました』と彼は洗面抱へて居る。

其の時私は、二日程前、若しも警官が來る事でもあつたら、知らして貰たいとエルモラに命令して居つた事をすっかり忘れて居つたので、權官が何しに來たのだから一寸考へが附かなかつた。『何だい？』と私は當惑して云つた。

『警官がお出になりました』とエルモラは此の四五日、私に對して採用する敵意の調子で繰り返した。『丁度今堤の上に居りました。今にまいります』

道路に車の音が聞えた。私は急いで窓を開けた。チョコレット色した、素長い

骨張つた罌丸を脱出した馬が下顎をはづし、傷ましい面してガタリ／＼ガタ馬車を引つ張つて来る。

華やかな官服の灰色コートを着た警官は、ブツテリと坐り込んで自ら馬を驅つて居る。「如何ですか？ ユーブシキー、アフリカノヅツチ君？」と私は窓にもたれて叫んだ。

「あ、如何でございますか？」と彼は大きな、楽し相な聲で呼び返した。彼は馬を止めて忝々しく禮をした。

「暫らくお這入り下さい。一寸ご用がありますから」

警官は手を擴げて頭を振つた。「すみませんが出来ませんよ。任務がありますので、溺れ死した者がありました。私はヴオロシアに行くところですよ。』
「それ共私は警官の弱味を知つて居つたので平氣に云つた。」

「まあい／＼、私はヴオートセル伯爵から這麼ものを二瓶貰ひましたせ……」

「結構ですが、義務ですから……」

「此りや侯爵家の伙食管理が知合だつたから賣つて呉れたので、親が子を育てる様に、彼が穴倉の中で育て上げたものです。まあお這入り下さい。お馬には燕麥をやる様に命じて置きますから」

「どうですかね？」と警官は輕視様に云つてまた、

「まあ何より職務が眞先ぢやありませんか？ 時に、其の瓶、其れは何です？ 梅焼酎ですか？」

「そうです。私は手を振つて云つた『強い焼酎ですよ』

『正直の處、一杯頂き度いですね』と警官は顔を顰めて頬を搔いた。
私は前の調子で、

『本當か何うか知りませんが、飲食管理は此の酒は二百年にもなるものだと云つて居ました。臭は丁度コグナリの様です、そして色も立派な琥珀色です』といつてやつた。

『やつ、こりやー、たまらない？』と警官は嬉しげな、又失望した様な聲で叫んだ。『誰か馬をとつて呉れませんか？』

此の酒(其れを數瓶持つて居た)は去程古びては居なかつたけれど、其の非常な強さから考へると幾十年は経過して居るらしかつた。

兎角此れは眞の手製焼酎で、廢顏貴族の穴倉の誇だ。警官ユーブシキーは、悪症の風邪を催して居るから一瓶呉れとて切願した……おまけに大根漬のご馳走を出して呉れとて相談した。

『其處で其の、御用と云はれるのは何ですか？』と警官は五回目のコップを飲

みほし、古い安樂椅子にそり反れば、椅子は身體の重みにキシめく。

私は哀れなる婆さんの境遇を徐ろに語り出して、其の頼り無さと、絶望を示し、遂に官衛の虚禮なんか馬鹿くしい不必要なものだとやつつけた、

警官は汁多い大根の皮を勢いてガリムと噛みながら嚴かに頭を垂れて聞いて居た。

彼は無頓着な膽汁質の嘲弄する様な小さな青い眼で私とチョツノ見だが、痘痕のある赤面には何たる情も表はれず、興味も反對もあるらしくは無かつた。話が終ると彼は斯う尋ねた。

『それぢや、私に何ういふ御相談があると仰しやるのですか？』

『それは、彼等の事情を何うか吟味して貰ひたい事です。あの頼りの無い二人の女は生活する権利があるのです』

『其の一人は別嬪ですか?』と警官は嘲弄的に云つた。

『其麼事は何うでもいゝですが、君は二人に同情して下さらないのですか? 其麼に急いで追ひやられるといふのには止むを得ぬ事情があるのですか? 暫らくお待ち下さる事は出来ませんか? そうして頂く内に私が地主にも相談しますから。一月待つ爲に何ういふ危険が起るといふのですか?』

『什麼危険が起りますか?』と警官は椅子から身を起した。『眞平御免、私は何でも危険……私の職業其のものが危険です。新地主のイヤセグツチの如何なる者なるかは神が知り給ふ。其奴が告發人らしいのです。素早いものでな! 一筆啓上で報告はもうセント、ペトログラードに行きますからね。實は其う云ふわけでご座います。』

私は激情して居る警官を静めようとした。

『なる程、ユーブスキー、アフリカノウツチ君、君達は針大を棒大にするからいけない。栓じつめた處で其が何の害になりますか? 危険だ危険だと云つて感謝すべき處は小さくして仕舞つてる』

『ヒュー……?』警官は長く口笛を引張つて俯向き、手を深く臀部のポケットに入れた。『人は二十五圓を感謝の記號だと云ふのですか? 僅か二十五圓位なことで職務の地位を危険に曝されるものですか? 眞平です、君は拙者を知りなさらなう』

『君、怒らなくつてもいゝぢやありませんか? 之は金銭上の問題で無くて、單に……そうだ、人情問題です』

『人情——問題?』と彼は嘲弄的に一語々に力を入れた。『失敬ですが、私は這麼人間には困まつて仕舞ふ』と彼は溜になつてるカラーの上に強い青銅色の

後頸を力強く叩きつけた。

「餘り激ひぢやありませんか、ユーブシキー君。」

「一寸も激い事無い。有名な物語作者、クリコフの意見では巫女は隣人を呪ひます。其う云ふものです。君はオルソフ皇太子殿下のお書きになつた「巡査」と云ふ本をお讀まれましたか？」

「いや、まだ讀みません」

「其の慘状はもつと甚だしいのです。そして面白い高尚な道德的作品です。お暇の折には讀んでご覧なさい」

「其りや面白からう、讀んでも見ませうが、其の小本と二人の女との間に什麼關係がありますか？」

「什麼關係つて？ 至つて眞實な事。第一」(アフリカノヅツチは其の肥つた毛だ

らけの食指を左手の上に置いた)「警官といふものは人々が熱心に神の教會に出て居るか何うか常に監督を致します。あの女は出て居ますか—名は何と云つて居ましたつけね？……マヌイーリカ、左様ぢやご座いませんか？ 其の女は常に教會へ出ますか？」

私は話が餘りに變つたのを驚いて黙つて居つた。

「第二に、何處でも僞豫言と占トは禁せられてあります。其の位な事は御承知でせう。今度は第三に巫女や魔法使になつて、其の種類の詐欺を練習する事は禁せられてあります。何うです？ 若しも斯う云ふ事が皆露はれたり、直接權官の耳に達したら何うでせう？ 誰が辯解をしますか？ 若し私が辯解しましたら上官は私を蹴り出すでせう？ そうなつたら私は馬鹿らしいぢやありませんか」彼は再び安樂椅子にベツタリと腰掛けた。其の眼は上へ向いて室の壁の上を茫んやり

と見渡し指ではテーブルを高くトーンと叩いた。

『それは左様でせうが、お願ひしたいのです』と私は平和な調子で再び初めた。

『確かに職務は重大で煩雑なものです。けれ共僕は君の心が黄金に善なる事を承知して居ます—何を差上たら、此の女たちと干渉しないといふ約束をして下さるでせう?』

『君の美しい小銃』と彼はトーンと止めないで云つた—『有名な小銃。是前参りました時お留守中失敬ながら拜見してチャンと其に憧がれて仕舞ました—不思議な小銃』

私はグルリと頭をめぐらして銃を見、

『そう、悪くは無い』とて自賞した。『古いものでね、ガスチン、レチットといふ人の造つたのです、去年私は其を中火に變えました。バーレルにお氣附でし

たか?』

『へえ、特にバーレルを拜見して、まあ憧れ込んで仕舞ました—素破らしいものです、此の上無い寶で御座います。』

二人は目と目を見合した。そして私は微かなれど意味ありげな笑が權官の口の隅に顔へたのに氣附いた。そこで座から起ち、壁から銃を取つてユーブシキー、アフリカノヴツチに近寄つた。

『シルカス人の間には甚だ愉快な習慣があります—お客の賞めたものは何でも與るといふんです』と私は深切相に云ふてやつた。『君も僕もシルカス人では無いですが、何卒紀念にこれを取つた下さり』

警官は赤恥かいて居た。

『お許し下さい、這麼御深切……いや、其はあんまり甚だしい習慣です』

けれ共私は直ぐ彼を説き伏せた。警官は銃を取ると、丁寧に膝の間に置き、奇麗なハンケチで引金の塵を可愛げに拭いた。鐵砲好きで、しかも其の使用にも熟練せる彼の事だから、さぞ嬉しかつた事だらう。

彼は起ち上ると直ぐ、立ち去るふとした。

「職務は猶豫が出来ないのですが、貴方と無駄話して時間を打忘れつ仕舞ました」と彼は木靴で床をゴトン〜と鳴らした。「私共の方へでもお出の節は、何卒お立寄り下さいませ」

「それでは、マヌイリカのことは、何うして下さるのです？」と私は氣を利して優しく出た。

「とくと吟味して見ませう」と彼は曖昧に謔いて更に「處が、もう一つお願いしたい事があります。お宅の大根は立派なものですね」と云ふた。

「内の大根は僕が自分でつくつたのです」

「立派な大根です。宅の山神は野菜が大好きですから……ごうか、お一束……」

「あゝ何より易い事です。差上りますとも……今日小籠を使に持たせて上げます。君はバタをお好ですか？僕は何時も澤山持つて居ますが」

「あゝ、それぢや、バタも少し」と警官は喜んで居た。「其れから婆さんには、私が暫らく關涉しない事を知らしてやつて下さいね。只、その」と彼は急に聲をあげ、「お禮ばかり云つた處で仕様がありません。其れぢや失敬しませう。重ね〜、ごうも色々感謝致します」

彼は軍隊風に踵を寄せて、重い武器を身體一ぱい着けた人の様にポテリ〜と歩んで行た。

九

ユーブスキー、アフリカノヴツチは約束通り森の小屋に住む人を何時迄も事無にして呉れた。けれ共私とオレシヤとの關係は不計不思議な變化に出會した。オレシヤは私に對して元の優しさも、無邪氣な自信も失ひ、其れと共に其の生々とした舉動に見えて居た樂しげな愛らしい娘盛りの秋波も痕跡無くなつて仕舞つた。話をする間にも一種のおどろした心の束縛が顔に表はれる様になつた。ともすれば棘々とオレシヤは、知識の追及に様々な質問をすることを避けようとした。

私が訪ふ毎に、オレシヤは強いて嚴肅になつて仕事をしたが、折々には仕事の最中ボカんと力無げに兩手を膝の上に落して自分の眞ん前を茫然見つめる事があつた。

あつた。

斯る瞬間、私がオレシヤの名を呼んだり、又何か話しかける様な事でもあると、オレシヤは戰慄して靜かに私の顔に見入つた。其の顔には一種の恐怖と、私の言葉の意味を悟りたいと云ふ氣持が輝いて居た。時々私の友情がオレシヤの迷惑となつてゐるのではあるまいかとも思つたが、僅か數日前、私の云ふたり説いたりした事が激く女を面白がらしたのを思ふと左様でも無いらしい。

そこで私は、警官の問題に就ては何も心配のないように斷じて保護するから安心せよといつたら、オレシヤは屹度私を許して呉れる事だらうと想ふた。然し此の假定も猶私を満足させる事が出来なかつた。一體、寂寞たる森林の中に育つた一人娘に何うして斯ういふ六ヶしいところが出来たのだらう？

是は皆穿鑿を要する事であるが、打開けた話をするに便利な機會があるとオレ

シヤは必ず其れを避けた。

斯うして私共の夕の散歩は止んだ。私は遊びに行つて別れる時には何時でも切に懇願する様な目附でオレシヤを見なければ駄目だつた。オレシヤは其の意味をも悟ることが出来なかつた。

時々、私は吾が身の意氣地なさど、日に日にオレシヤに引き寄せらるゝなづかしさを秘かに恨むだ。

私は強い目に見えぬ繩で、吾が心が其の恍つとりと人を迷はす不可解の乙女に結び附けられて居る事を疑はなくなつた。未だ其の感じを戀だとは思はなかつたが、已に私は、混亂と苦痛の知覺に充された戀に先だつ危険な時期を通り越した。何處に居つても、什麼に其の感じを轉じようとしても、私の思想はオレシヤの姿に捉はれ、私の全心はオレシヤを慕ひ、その以前の極めて意義ある言葉や動作や

微笑を懐ひ出せば懐ひ出す程、心はジツトなづかしい苦しさに壓された。

處が或晩の事だ、どかくして私はグラつくペンチに腰掛け、オレシヤに近く身を寄せて居ると、何時もより臆病な拙ない負けた様な悲しい感じがして來た。

どうしたのか、私は這麼風にしてオレシヤの横に終日過した。明くる朝になつても、私は快くなかつたが、さて何麼病氣だかど明瞭云ふ事は出来なかつた。

其の晩になると私は段々悪くなつた。頭は重く、耳はブン／＼なつて、頭の頂上は誰か柔かなれど強い手で壓さえて居る様に、魯鈍く絶間無く痛んだ。口は乾き果、身體中物憂い衰弱が浸み渡つて何時も呻して踏みぞり反つてばかり居たかつた。目はピカ／＼光るものを近く注意して見て居つたかの様に痛を感じた。

半夜私が歸路に就て居ると、道の半分も行つたと思ふ時忽然と寒氣が身に徹した。私は辛くも徑路を探して、酔つたくれの様に逶迤ながら足もと覺束なげに辿

つた。其の間額は大鼓の様にガタ／＼なつて居た。

其れから先は、誰が家に連れ歸つて呉れたか解らない。確に六日の間は怖ろしい森熱が私の身體に激して居た。晝は熱が減じて意識を回復したので病氣の體屈さに、辛どこさで室を歩いて見ると、膝に力が無くて痛む、一足踏めばグタリとして血潮が燃え上る波のごと頭を突破する。何でも彼でも目の前のものが暗黒に包まれる。

晩は、何時も七時頃になると熱の發作が私の身體を貫いて波立ち、私は懼ろしい夜を床上に過した。其れが一世期の様に永くも思はれた。漸くどろ／＼とまどろむかと思ふと奇怪な馬鹿氣な苦しい夢魔が私の燃ゆる腦髓を襲ひ初めた。様々な幻影が細微なものに充され、其れが一つ一つに重なり重なり連り合つては形無くモチ／＼と纏れて仕舞つた。

或時、私は色彩陸離たる驚くべき箱を開いて其の中から小さな何ものかを取り出し、其の小さなから復更に小さなのを取り出して幾度とも限りなく繰返へして居ると、遂には開けられなくなつた。又或時、私の目の前に壁紙の剝げたのがチラ／＼と過ぎて行つた、其の紙には模様様の様にクツキリと浮き出でた人相の花環があつて、其れが美しい幸福な、笑を含んで居るかと思ふと、舌を出したり、輕蔑したり、眼玉を眞白になしたりして最怖ろしい意地氣面になる。

と見る間に、私はまたエルモラと錯雜した神學上の議論をやつて居る。相反して互ひに持ち出す議論は段々巧妙深酷になつた、一言又一言、一字又一字すら急に神秘な驚くべき意味を呈し、同時に厭々しい怖れが強く強く私を捉え、私の頭から交々不規則な詭辯を絀ぎ出した目に見えぬ超自然の力を捉えて、此の汚惡な議論を急にふり離そうとしても離させない。次には人間や、動物の形や、景色や、

奇々妙々なる形と色と、私の全感覺を透徹せしむる素破らしい言葉が熱湯の如く渦巻いた。けれ共―不可思議なる哉―始終天井の上にランプで其の丸い緑の影を反射した明るい滑らかな圓形が見えて居た。そして私は何うしたのか、此の緑の明瞭せぬ静かな圓形の中に沈黙した單調な神秘な怖ろしい、しかも私の荒寥渾沌たるものよりも猶苦しく痛いものが蔭されてあるのだと思つた。

それから私は一寸眠つたか眠むらなかつたかと思も途端、あり―と目が覺た。殆ど全意識が私に歸つて來た。私はハット床に就いて居る事に氣づく、病氣であつた事に氣づく、時々發狂して居た事に氣づく、けれど暗い天井の明るい圓形は其の祕密な前兆ある威赫で相變らず私を嚇した。ブル―と顫える手を差し延べて時計を取つて見ると悲しい何が何やら分らないで、私の怖ろしい夢の無限の連續が二三分より永くは無かつた事に氣附く。

『お、神よ！何時朝になりますか？』と私は燃える枕に頭を投げおろし、はあくど吐く息に唇が炙られる様に感じつゝ、絶望して考へた。けれ共再び微睡が催して復私の脳髓は變化窮まり無い夢魔の襲ふ處となつた。それから復二分間も經つと目が覺めて蕭殺たる悲痛に充される……

六日の後私の強壯な體格は幾那鹽の助けと甘蕉の注入とで熱を追つぱらつた。私は何うやら床から起き上つた。快復も經過が速かだつた。六日の激しい熱に疲れては居たものゝ、頭脳には今や一味の疲勞を帯びた楽しい虚空を感じた。食慾も回復して二倍にも増進し、全面の毛孔は健康と生命の喜びを吸収して間も無く一層壯健になつた。同時に一新せられたる力を以つて森に行き、淋しい小舎を音づれたくなつたが、神経は未だ快復して居なかつたと見え、私はオレシヤの顔や聲を追想する毎に叫びたい様に優しさやるせなき情緒を感じた。

十

更に五日は経過して、私は餘程力を得たので供の者をもたづさへずに小舎へと歩いて行つた。入口に進み寄ると、思はず心臓が憂と懼とにドキドキした。今日まで殆ど二週間、私はオレシヤを見なかつたので、何處にオレシヤが私をなづかしく想つて居るか、明かに豫想せられる。扉の把子を握つて、息を凝らしながら私は暫し止まつた。決断しかねて私は暫し目を閉じたまゝ、戸を開けなかつた。將に這入らうとした時の感じはとても云ふ事が出来ない。誰だつて母と子、夫と妻、或は二人の戀人が相會ふて最初に語り合つた言葉を思ひ出す事が出来るだらうか？よし其れが平々凡々な言葉であつても再び筆に現はせば誠に不適當に響くだらう。けれ共實際其ういふ折に語る言葉は、世界に於ける最もなづかしい

聲と聲とで語られたものだから無限に貴く見えるものだ。

私は只オレシヤが蒼白い顔で急に私に見向いて、其の愛らしい顔にチラリと、混乱、恐怖、警告、其れから嬉しい明るい愛の微笑を輝かせたのを今更の様に想ひ出す。婆さんは私の横で何と云うかウー云つて居たが、其れは喜んで居るのでは無かつた。オレシヤの聲は美妙な音楽の様に響いた。

『かうなりましたの？御病氣で被居したのではありませんか？まあ、お瘦なさいました事』

私は暫らく何も答へる事が出来ないで、互ひに手を握つたまゝ黙つて嬉しげに目と目を見合せて居た。私は此の數分間程、一生に於て幸福だつた事はないとよく思ひ出す事がある。私は這様に純潔な充實した力で戀着した幸福を経験した事は無い。その時私はオレシヤのくるくとした眼に無量の情を讀んだ。遭遇の

熱情、久しい沙汰の責、愛の燃ゆるが如き告白……私は此を見るとオレシヤが何の情實も躊躇も無く喜んで私に其の凡ての魂を與へた事を感じた。

オレシヤは婆さんの方を意味ありげに一寸見て先づ妖術を防いだ。隅のベンチに腰掛けると、オレシヤは心配相に、私の病氣の原因や、全快の事や、醫者のいふた事を細々しく尋ね初めた（醫者は田舎町から二度來て呉れた）。特に醫者に就ては五六度までも繰返して尋ねた。そして私は一二度チラリと意味ありげな微笑の彼女の顔に洩れるのに氣附いた。

『あゝ、何故私は御病氣で被居した事を存じませんでしたでせう！』とオレシヤは堪らない不安な態で叫んでまた、

『私でしたら一日で癒してお上げしたでせうに。醫者といふものは何にも一ほんどに何にも知らないものです。貴方は何うして醫者を信じなさいました？何

故私をよんで下さいませんか？』

私はおわびを云ふてやつた。

『ですけれど、全く不意に起つた事ではあるし、且つお知らせする事を恐れて居りましたものですから。そして近來貴嬢が何かで怒つて居らつしやるか、私が御機嫌を損つたかで、私にとつて貴嬢が解釋されなくなつたもんですから。』

と私は聲を低めて續けた『私は貴嬢に山程お話があります』

オレシヤは視點を下げ怖々と婆さんを一見して早口に『えゝ、私もお話がありますのよ……けれども一寸お待ち下さいね……』といふた。

日暮になるとオレシヤは私に歸宅を奨めた。

『さあ〜直ぐに』と彼女はペンチから手をとつて私を引つぱる『お寒むくなるど、復急にお熱が出ますから』

「これこれお前は何處へ行くのかへ、オレシヤ？」と婆さんは孫が大急ぎに頭の上の木綿のシヨールを引つかけるのを見て云ふた。

「一寸行つてまいりますよ。少し先までお供してね……」とオレシヤは答へる。

オレシヤは婆さんを振り向きもせず、平氣で家を出たが入口から一寸内を顧みたら、優しいオレシヤの聲にも猶激動の氣分が現はれて居た。

「やつぱり行くのかい？」と婆さんは語尾を強めて問ふた。

オレシヤの眼は閃めいて眞面にマヌイリカを見た。

「はあ、行きますよ」と彼女はハツキリ返答する『早くから其の事を幾度も話しましたでせう……私の勝手ですもの』

『まあ〜！』と婆さんは悲と嘲弄とを含ませて云つた。婆さんは未だ何か云ひたげであつたが、只手を振はし、隅の方に透迤寄り、深い嘆息を吐き忙はしげに

籠の仕事を初めた。

私は此の不快な會話が何かの争と責合の續きだと目のあたり見てとつた。

オレシヤと松林を歩きながら私は斯う尋ねた。

『祖母さんは貴嬢のお供して下さるのをお厭つて居られる様ですわね。』

オレシヤは悲しげに肩をすぼめた。

『其處ことを御心配下さいませ。祖母さんが厭だといつてもいゝぢやありませんか？でも何うでせう？私は自由に楽しむことは出来ないんでせうか？』

オレシヤが以前私に對してとつた苛酷な態度を思ひ出して、私は斯ういふてやつた。

『私が病氣をします前は何うでした。あなたは何時でも私を見送つて下さつたでせう。それに突然冷めたくなられて、どれ程あなたは私を痛めて下さつたやら分

らない。何時もの様にあなたが毎晩散歩して下さつたらと私はどれ丈念じたやら分りません……』

『もう其麼事はお止し下さいね。お忘れ下さいね』とオレシヤは優しい懇望を聲に秘めて云ふた。

『いや私は怒つて云ふんぢやありません。只ありの儘を語るのです……私は何故あなたが冷めたくなられたか確かに其の理由を知つて居ます。あなたは私を驚官に關係ある者だと思はれたのでせう。だから平々凡々な友情をさへ私から受けるに足らないとまで思はれたのでせう。飛んでも無いことです。その爲めにどんな麼に私が苦しむだか察して下さい。然し其れも祖母さんのお考へから出たのだらうと私は思つて居ました。』

『だつて祖母さんにも其麼事は御座いませんでしたよ……只私が厭だつたから

厭だつたのです』とオレシヤは一向遠慮も無く私を攻撃してかゝつた。

私は横目にオレシヤを睨んで見た。すると氣持頭を垂れたその顔の半面が如何にも純潔に見えた。日頃に無く其の時はオレシヤの顔が蒼白くて、目の周圍には何だか暗い影が見えた。私の瞥見に氣が附くと、オレシヤは私に眼を注いだが、復直ぐ俯目になり、臆病な笑を洩して向き直つた。

『何故お厭でした？』と私の聲は激動のため顫え出た。迫る様にしてオレシヤの手を強く握ると、何時しか矢の様に長い真直な狭い空地に出て居た。亭々として立つて居る松は参差織りなされた枝で穹窿を形づくつて、其れが巨大な長い廻廊をなして居た。私共は其の中に這入つて行つた。禿げた裸體の幹は沈み行く夕日に紫色を呈して居た。

『何故？何故オレシヤさん？』と私は一層手を固くしめてくりかへした。

『出来なかつたからなんです……怖くつて』とオレシヤ小さな聲でつぶやいた……
 『私はね運命から逃げて飛んで行かねばならぬと思ひましたけれど、もう……もう……も
 う……』忙はしげに息吐いたが其の両手は意地早くも、緊かど私の頸の廻にまつ
 はつて、オレシヤの頸ぐ囁は私の唇を燃やした。

『もう決して私は變りませぬ。永久に變りませぬ。永久に貴方を愛します……』
 彼女はジツト私にクツ附いた。私は吾が手の内に打顛ふて居る彼女の優しい姿を
 感じた。其の熱情の接吻は強い酒の様に未だ熱病の爲弱つて居た私の頭に上つ
 た。そして私は自制力を失つてしまつた。

『もう澤山です、お隔れなさい』私は女の手を放さうとした。『私は怖い、自分
 が怖い。放して下さい』

彼女は優しい何時迄も消えぬ笑に輝き渡る顔をもたげた。

『怖いのですか』と彼女は優しい愛に顛へる心の得も云へぬ表情で云つた。

『私は決して貴方を侮辱しませぬ。又私は誰をも妬みません。どうぞ是丈御返事
 下さいね。貴方は私を愛して下さいますか？』

『愛します、もう早くから愛して居ました。でも、もう接吻は止して下さい。私
 は弱つてる、頭がフラ附く、して何が何やら分らなくなりまますから』

彼女の唇は復何時までも嬉しい寵愛にて私の唇にくつ附いた。私は何だか
 神々しい氣になつた。『ねえ、怖れなさいますな、何にも思ひわづらいなさいま
 すな。……今日は私共の日ですもの、そして誰も私共から其の権利を奪ふ事は
 出来ませぬ。』

其夜は終夜奇々妙々なる巫術の昔話に過ぎした。月が出た。其の光は幻想千

態で、神秘的に森を明るうし、丸い幹や、節多い枝や、毛氈の様に柔らかな苔の上
上に異様な蒼い班點を施して暗黒の中に横はつた。

樺の細つそりとした幹は彼方此方に眞白に輝いて、其のまばらな葉の頂には
銀の様な紗の透き通つた顔蔽が垂下つて居る様に見えた。處々辛うじて光が松
が枝の打茂つた幕に深く浸み込んだ。廣く全く光の通射せぬ暗黒が統御して居た
が、其の眞ん中に何處から來たのか一條の光が突然煌々として木立を一直線に照
し、地上に狭い眞直な徑路が投げつけられた。其れがオベロンや、テイタニアの誇
りなる行列の爲め、妖怪共に飾られた園路の様に明々煌々として美しい。私共は
幸福な現實の物語をしつゝ、森の莊嚴な靜蕭に打たれ、言語は絶して、只々手に手
をとつて歩るいた。

オレシヤは突如として斯う云つた。『ほんとに嬉しい事！ 貴方は御全快なさい

ますし。斯うして私は森の中に御一緒に居ますよ』

私はオレシヤを抱いて其の膨らみある黒髪から頭巾を推しのけ、耳のあたりに
俯しかんで優しく問ふた。『貴嬢は悲しくはありませんか？』

オレシヤは頭を振つた。『うーえ〜。何麼事がありましたも悲しいとは思ひ
ませぬ。私は這麼に幸福ですもの。』

『私共の上には何か避け難い事でも起るのですか？』

女の眼には、私を熟知して居るといふ一種超自然の恐怖に戦ぐ様な光が輝いた。
『はあ其うですよ、避け難い……貴方は私がクラブの女王に就てお話し申上まし
た事を憶えて居らつしやいますか？ クラブの女王は茲に居ます—私のことです。
札が豫言した不幸は私の上に着ちるのです。私はね、お出下さる事を、もう止し
て頂戴つて願ひしましたでせう。そしたら、病氣におなり遊ばしたものですか

様なものゝ起つた事は無つた。

若い強烈な獸の様に、私は其の頃、熱烈と、生存の發見せられた幸福と、靜蕭な健康と、生理的の愛を喜んだ。

老ひたるマヌーイリカは私の全快後馬鹿に粗暴になつてしまつた。そして明らかに敵意を以つて私に向つた。會に其の家に坐り込む事でもあると、茶器でも鍋でも、ガタシチとストーブのあたりで動かした。それでオレシヤト私は毎晩一緒に森の中に散歩する事にした。森の偉大な縁の美は、貴い寶玉の様に、二人の心おき無き愛を飾つて呉れた。

毎日、不可思議な念を増して行く私は、一箇の娘が讀書も知らないで森の中に育つて、よくも禮節優雅に、しかも常ならぬ天賦の手練を時に應じて巧みに表はして行く事よと思ふた。

愛は――性慾的に考へられた――常に神經質的的技巧的に傾いて、苦痛と恥との基となる粗惡な半面をも備へて居る。然しオレシヤには天賦の力があるので、斯ういふ粗惡な半面を避けて、毫も二人の親愛を疵けなかつた。

斯うして居る中に袂別の時は近づいて居た。事實を云へば、ペレプロッドに於ける私の仕事は已に終つて居たが、私はわざと歸省を延期した。けれ共私は、出立の必要を、オレシヤに暗示されるのが怖わい様な氣がして、未だ其の事に就ては少つとも話さなかつた。けれ共遂に、私は困つた事になつたのに氣附いた。私の心は何うも斯うもならなくなつて居た。

毎日オレシヤを見たり、其の愛らしい聲や、爽かな笑聲を聞いたり、其の愛撫の優しい迷を感じたりする事が私にとつて、とても缺ぐべからざるものとなつた。會に雨が降つて會へない日になると、私は全く自己を失つた様な生命の最も大

切なものを全く押し除けられた様な感じがした。何麼仕事も私には物憂く不
要に見え、私の全人格は森や暑熱や光やオレシヤのなづかしい顔に向つて叫んだ
オレシヤと結婚しようといふ考は一層力を増して頭を冒した。最初其う云ふ
考は、少くとも二人の關係の必然の結果とした會に起る位な事であつたのに。
只一つ茲に私を警戒したものがあつた。私はオレシヤが何麼人であろふか、物語ど
不思議な力とを携へ、古い森の不可思議な家から立出で、流行の衣をまとひ、吾
が友の妻君達と客間で談話する事が出来ようかとは思像しても見なかつたが、出
立の日が近づくに連れ孤立悲愁の怖れが私を襲ふて、結婚したいといふ決心は益
々強まり、其が爲には社會が何うしようど何願みるものかと云ふ氣になつた。『よ
しさ、立派な教育ある人が縫女とか下女とかと結婚する事さへあるぢや無いか』
と私は自らを慰めて云つた『そして幸福に生活し、一生の終に臨んで、反つて

そうした事を運命に謝するのが世の常ぢや無いか。俺だつて人より不幸な事があ
るものか？』

六月中旬の或る日、夕暮近く私は何時もの様に花咲く山植子の叢かげなる狭
い森の路の隅にオレシヤを待つて居た。遙か、乙女の軽ろい速かな足音が聞こえ
る。

『如何でございますか貴方？』とオレシヤは私に抱き付き深い嘆息を吐いて云ふ
た。『お待ち疲れましたでしたせうね？私、辛出てまいりましたんですよ。祖
母さんは、もう何も彼も面白くない様になりましたの』

『まあ、お仲直りなさらないのですか？』

『駄目でせうよ！祖母さんはね、お前はあの人から弄ばれたんだよ。あの方は
只道樂にお前を愛して後には棄て、仕舞ふんだよ。あの方は眞實お前を愛して

んぢやなると云ひますもの……』

『其麼事を云はれますか？』

『はあ、そうですね。でも私は少つとも信じません』

『祖母さんは私共のことを何でも知つて居られますか？』

『よく解りませんが知つて居る様ですよ。私は少しも話しませんですが、祖母さんは何事でもあてますもの。もう其麼事は考へますまい。さあ歩きませう』

乙女は白い花の馨ばしい毬ある山楂子の枝を折り取り髪に差し缺んだ。二人は夕露結ぶ徑路を靜かに辿つた。

私は前夜、ごんな事があつても今晚はオレシヤに告げようと決心して居た。けれども不思議な膽病が私の舌をくくつた。私は思ふた。

『若しも俺が出立の件と結婚の件を語つたら、オレシヤは信するだらふか？私

は只身に及ぶ疵の苦みを柔げつゝ吾が意見を辭して居るのだとオレシヤに思はれはすまいか？よし、あの皮厚い楓樹のもとへ行つたら話して見よう』と私は秘かに決した。二人は楓樹の下に達した。私は激情に顔青ざめ、話し初めようと息吐いたが、勇氣が挫けて心臓は神經質的に苦しく打ち出した。『二十七歳——二十七歳は運の悪い年だ』と私は數分の後想ひ當つた。『二十七まで數へて見よう、そしたら……』と私は心で數へ初める。二十七と數へ着いた時、私はまだ、吾が決心の熟して居ない事を感じた。

『58』と私は私かに思ふた『六十迄數へ上げて見たがいゝ、六十はいゝ年だらう左様したらキットー』すると、

『何うなさいましたんですか今日は？』と突然オレシヤが尋ねた。『貴方何か不快な事を考へて被居るでせう。何事でご座いませう？』

其れに答へて私は次の通りに語つたものゝ心ならぬ不自然な軽卒な頓調子が出た、『事柄にはいさゝか不快な事があります。貴嬢はよくお當てなさつた……私此の地に於ける職務は終つて、長官から町へ歸れと呼び返しがまいりました。』一寸オレシヤを見ると其の顔は色あせ唇は顫えてゐる。けれ共何でも答へ無い。暫らく黙つて私はオレシヤと並んで歩んだ。草間には何處からとも無く蟋蟀が聲高く鳴き出した。遙か秧鶏の單調な引つ張つた鳴聲がする。

『勿論』と私は再び初めた『滞在しますのは私にとつて不便だし、又義務を怠つてはなりませんからね』

『いゝえ……でも……何でも申しようがありませんね』とオレシヤは落ついて答へたものゝ、聲は淡暗く生命無く、それが私に恐怖の苦痛を與へる。『義務の問題でしたらお歸りなさらなくてはなりません』

彼女は木の近くに立止つて、幹に倚りかゝつて顧みた。其の顔の眞白さ、兩手は力無げにバタリと垂れて、唇には情無い苦痛の笑が浮んだ。其の青白い色は私を驚かした。私は女に俯しかんで其の手を堅く握つた。

『オレシヤさん、何うなさつた？』

『何でもありません。直ぐ直ります。頭が一フラ附きますの。』オレシヤは力を回復して、私の手から吾が手を振り取らないで前へと進んだ。

『オレシヤさん、貴嬢は、私を誤解して居なさるのね』と私は輕しめてやつた。『其れは貴嬢の耻です。私が遠くへ行つて、貴嬢を棄てる事が出来るものだとお考へなさいますか？其うぢやありません。實はね、私は今日祖母さんの處へ行つて、貴嬢を私の妻に下さいと云ひたいと思つて此の話を初めたのですよ』

少つとも思ひ掛がなかつた、オレシヤは是を聞いて餘り驚かなかつた。『貴方

の妻？」と彼女は頭を静かに悲しく振った。「いゝわ、其は叶ひませぬよ、貴方」
「だつて何故オレシヤさん？何故？」

「でも其廢事は可笑しいぢやありませんか？本當に私が貴方の妻の役に立つものでですか？貴方は貴族で御聰明で御教育があられますでせう。そして私は？私は讀書も仕事も出来ない女ですもの。お恥になる迄の事ですわ」

「其は謔言だオレシヤさん」と私は腹立しげに答へた。「六ヶ月の間貴嬢はご自分がお解りにならなかつたのです。あなたは心にも動作にも非凡な力を先天的に持つて居られます。ご一緒に澤山のよい本も讀みませう、いゝ深切な人達とも知り合ひになりませう、一緒に廣い全世界も見物致しませうオレシヤさん。手に手を取つて老年まで否死ぬるまで、今の様にして行きませう。そして恥ぢる處か、私は貴嬢を誇にし、貴嬢に感謝します」

私の激しい話にオレシヤは感謝して手を抑えて居たが復孤立を續けた。

「けれど其れつきりでせうか？貴方は御存じなさらないのでせう。私が少つともお話しませんでしたから……私にはお父さんがありません……私は私生兒ですもの……」

「止しなさい……其廢事は何でも無い。貴嬢といふ其の人が父さん母さんより、全世界よりなづかしいのだから、御両親が何だつて何うありますものか？其廢事はつまらない、空しい駄目な事です」

オレシヤは左様ですよと云はむばかりに肩をすり寄せた。

「貴方は這廢事を被仰らなかつた方がよつぽご善かつたかも知れませぬよ……貴方はお若くて自由ですもの。私が御一生涯の手まごひ足まごひになるぞ存じなさいませう？……でございませんでしたら何がお喜びになるでせう？若し私

が結婚の承知を致しましたら、あなたは其の日其の時を呪つて私をお惡みなさいますでせう。お怒り遊ばさないでね。彼女は、此の言葉が私の不快を招いた事を知つて又續けた。『私はお妨げになりたくはご座いませぬ。私は貴方のご幸福ばかりを思ひます。彼是する中に、貴方は祖母さんの事をお忘れなさいますでせう。まあお考へ下さいまし、祖母さんを一人残していゝんでせうか？ 何處處に祖母さんと一緒に住めるでせう？』(目のあたり、祖母さんの思想が嚴かに私を錯亂した) 『そして若し祖母さんが私共と一緒に住みたくないと申しましたら？』 『その時は、どの町にでも家があります—救貧院と云つてね—其處では這婆さん達を心安く氣を附けて看護して呉れます』 『いゝえ。何をお考へなさるのです？ 祖母さんはね決して森を出ません。祖母さんは人が怖いんですもの』

『それではオレシヤさん、貴嬢は自分のため何がよいかお考へなさい。私か祖母さんか何れか一つをお選びなさい。だが、たつた一つ知つて頂きたいのは、貴嬢無くして、私は生活に堪えられませぬ』

『私の生命の日影』とオレシヤは真から深い愛情で云つた『有り難うご座います。貴方は私の心に觸れました……が、やつぱり私は貴方の妻には決してなりません。お考へ下さい。若し貴方が私と離縁なさいますなら、私は這處にして只今の様にして居ましたがよいでせう……そんなにお迫り下さいますな。何卒私に二日の隙を下さいませ。そしたら善く考へますから。祖母さんにも相談しなくてはなりませんし。』

『オレシヤさん聞いて下さい』と私は新らしい一念に打たれて云つた『多分貴嬢は復……教會を恐れて居らつしやるのでせう？』

『教會が恐いのでせう』と私は繰り返した。

オレシヤは黙つて俯向いた。『貴嬢は神から悪まれてると思つて居られますのね?』と私は苛々して云つた『でなくては、神の恩恵は貴嬢に至らないどの思召です。ね?—幾百萬の天使を命じ給ふ神は地上に来て、人々の救の爲めに怖ろしい死をさへ堪え忍ばれたのです。賤しい女の悔を賤しめ玉はなかつたエス様は盜棒や人殺しと共に今日天國にある事を約せられたではありませんか?』

此の話はオレシヤには耳新らしかつた様であつたが、さて何うしたのか、オレシヤは耳傾けようとしないうで、大急ぎに頭巾をはね除け、皺くちやになして私の顔に投げつけ、惶惶しく逃げて行つた、私は其の後を追ふた。永の間オレシヤは叢の間をくゞり脱けつゝ私を避けたが、遂に私は追ひ附いて両手で腰の廻りに抱き附いた。オレシヤは地に倒れて愉快相に笑ひながら私を引き下げ、其の湿つ

た赤い唇を私にくつつけて忙がしい息を吐きながら遂には……

晩遅くなつて別れて、もう私は餘程行つたと思ふ頃突然後の方にオレシヤの聲がした。『ツアニチカさま、一寸お待ち下さい……何か申上ることが御座います』私は歩を轉じて彼女を迎へた。オレシヤは走り寄つた。天には淡い白銀の弓張月が走せ、其の蒼白い光で、オレシヤの眼が大きい涙で一ぱいになつて居たのが見えた。

『何うなされた?』と私は吃驚して問ふた。

オレシヤは返事に私の手をとつて接吻を初める。

『貴方は……眞乎に貴い方です』と感動して居る。『私は今歸つて居ましたら、眞乎に貴方が愛して下さいます事をしんみり思ひました! 私は貴方の爲に何か大變に善い事をしたといふ大きい要求が起りましたの。』

『オレシヤさん……静かになさいよ……』

『ね、あの一寸』と女は續けた『私が何時か教會に行きましたら、貴方は眞面目にお喜び下さいますの？眞乎に眞乎に云つて下さいね』

私は省みた。一種の迷信的思想が頭の中に閃めいた『是から何か不幸な事でも起きはせぬか』と。

『何故黙つて居なさるの？さあ云つて下さい。喜んで下さいますか、何とも思つて下さいますせんか？』

『何う云つていゝか分りませんね、オレシヤさん』と私は躊躇して初めた。『さう、大變嬉しいですとも。度々云ひましたら、男は信じないでも疑つても又は嘲弄しても許されるが、女は……女は何の斯うのと云はずに敬虔に信すべきものです。單純な優しい信仰で、神の守りの下に身を置く婦人は、何だか婦人らしい』

美しいものがあると何時も感じます。』私は止す。オレシヤは私の胸に顔を陰して答へなかつた。

『何故貴嬢は這麼事をお尋ねなさいます』と更に私はいぶかしげに問ふた。彼女は驚いて、

『あら、只お尋ねしたばかりですよ、御心配なさいますな。それちや左様なら。明日復お出下さいませ』といふ。

彼女は消えた。私は段々遠ざかり行くオレシヤの足音に耳傾けながら久しく暗黒に眺め入つた。俄然として迷信的恐怖は私を捉えた。私はオレシヤの跡を追ひ、追ひ附いて、懇願し、必要では、教會には行くなど命じようかどて、もう堪らなくなつた。私は此の意外なる激動をおし静め、家路に就きながら一人語ちた事をすら思ひ出す『此れではならない！神經が弛んで來たぞ』

あゝ神よ！如何なれば吾は心の不安なる激動に耳傾けざりしぞ（今では言論以上信じて居る）其の俄然として來る神秘的の豫告を通じて斷じて欺かざるものを？

十二

其の翌日は聖三位一體の祭であつた。其が丁度大殉教者、聖提摩太の日に當つて居るので、人の噂に依れば、饑饉の兆であるとの事である。ペレプロツドの村は宗門の目的上、外の牧會村に屬して居た—といふは、村に會堂はあつても定住の牧師は無くヴォルチ村から會に來て務めて居た—祝日とか大祭日とかに。當日私は義務上隣の町に行かねばならなかつたから、午前七時未だ涼しい時、馬に乗つて出立した。

斯う云ふ旅にもどて私は兼て六七歳になる小さな馬を飼つて居た。餘り上等社會に飼はるゝものでは無いが地方検査官なる以前の持主に可愛がられて、よく使役された馬だ。其の名はタランチークとて私は鑿を入れた様な其の立派な脚や、房々とした鬃や、其の下から猛々しく疑はしげに覗いて居る鋭い目や、強い確乎と閉ぢた口が激く氣に入つた。毛は妙な色で、大體鼠色であるが後の方は白黒の斑點になつて居た。

私は馬に乗つて村を横切つた。人家から教會へと辿る大路には隣村の百姓達の乗つた馬車が列をなして居た。

其れは妻を連れ子を携へて祭の爲めに出て來たのである。馬車の間には人が徘徊して居た。早朝でしかも堅い規則があるにも係はらず、彼等の間には泥酔漢が居た。（宿屋の男どもは終夜ポドカを賣つて居た）

朝の空気が静かで蒸し熱かつた。気が煮えかゝつて午過には堪え難い暑さになるらしい。銀の塵で蔽はれた様な熱する空には一片の雲影も無かつた。

町ですべき事を仕終へて、私は猶太の無頼漢が開いて居る料理屋に行き、どり急ぎ食事を済まし強い濁り酒を飲んで歸路に就いた。すると鍛冶屋の前に来て馬の前足の靴が脱げて居つたのに氣附いて、馬から下り靴を打つ附けた。

此が一時半かかつたので、ヘレブロッツの入口に着いた時は最早夕の五時近くであつた。

あたりには、泥酔漢や、匪徒どもの群がガヤ／＼云つて居た。旅屋の庭も階段も客が一ぱいドヤ／＼ガヤ／＼やつて居る。ヘレブロッツの百姓も、他處から来た參詣の者どもと車のかげの草の上に散ばつて居た。

其處にも此處にも仰向いた坊主や、高く差し上げた徳利が見えて居た。正氣で

ゐる者は一人も見えなかつた。皆酔つぱらつて、大きい事をいふて居た。ペラ／＼と身體を動かして居るのもあつた。ウン／＼と點頭て居るが、遂に身體中動き出して膝の上にゴツリと倒れかかつては忽ち安座を失つて後にそり返りボテリと倒れる者もあつた。子供等は、静かに秣を噛む馬の脚の下に、キヨロついて叫んで居た。

垣根の蔭には二十人ばかりの男女の一群が盲目音樂師を取り圍んで居た。顔へる鼻音のテノアが聞えるかと思ふ間にピー／＼と樂器の單調な音が響く。其の響がクツキリと群衆の絶えま無いごよみの上に聞こえる。遙かに隔りながら私は國歌の歌はれるのを聞いた。

『ポートケーイの寺の上。』

明き夕星輝けり。

隣の敵の陣屋より、

トルコ人等がどよむ時』

此の小詩には猶トルコ人がホロチエーヴスキの陣營を攻め取らうとした時の事が述べてある。即ち彼等は火薬を込めた大きい蠟燭を寺院に寄附した。彼等は二十四匹の牡牛に此の蠟燭を運ばせると、坊主共はマリヤ様の像の前で火を附けようとしたが、神はその悪計の成效を許し給はなかつたといふのである。

お告の夢は現はれぬ。

これには燈火を點するな。

野原に其を運び行き、
斧と棒とで打壊せ。

其を野原に持ち運び、

敵き壞して見たりしに、

殺人薬は豆のごと、

あちら此方に散らばりぬ。

堪え難い暑い空気には、焼けたポドカや葱頭や羊の死肉や強烈な煙草や汚い人間の汗や息がゴツチャ雑になつて居る様であつた。

私は人々の間を通つて行くと、何の側にもダラリとした奇妙な敵意ある瞥見に

氣が附いた。

彼等は風習に反して、一人も帽子を動かさなかつたが、私が近づくとギャクに騒がし鳴を静めた。

急ち何處か群衆の真ん中に、粗暴な醉漢が何事をか叫び出した。何だらうよくは聞こえなかつたが其れに續いて勝利の笑ひ聲がドット聞こえた。

すると責める者に向つて抗ふ女の常ならぬ聲が聞こえた。

『静かになされ、馬鹿な、何を云ひなさる？あの方が聞かれますよ』

『何だつて、彼奴が聞けば何だ？』と男が攻撃的に續けた。『彼奴が何だ、官吏か？彼奴は森ん中に行くんだせ……』

『ぶら下げろ』といふ聲がワハハと笑ふ聲々に交つて響いた。

私は急ち馬を廻して、鞭の柄をいきなりに掴んだ、狂氣の如き怒りに何も見え

ずなつた、考へる餘裕も恐れる餘裕も無い。

又俄然不思議な痛ましい苦しい思想が私の腦中に閃めいた。『是は皆、いつぞや俺が何處でか遭遇したのと同じだ……』ジリジリと日が焼つける。廣場は騒々しい群集に充されて居る、私は憤激のため病の發作を感じて復馬を轉じた。其は何時であつたらう？私は鞭を振つて家へと駆けさせた。

エルモラはブラ〜と臺處から出て来て、私を迎へながら澁面して云つた。『マリノブスキーからみえた執達吏が鄰那の室に待つて居られます』

彼は何か非常に大切なしかも不快な事があるといふ様な顔をした。私は故意に扉の前に止まつて反抗的にエルモラを見返へした。けれ共彼は私を見返へさうともせず、轡をとつて馬を引つ張つて行つた、馬は首を延べてヨト〜と歩いて行つた。私の室にはニキタ、ミシユチエンコと隣村の執達吏が居た。彼は大

きな赤微の附いた灰色のモーニングコートを着、淡い青色のズボンを穿ち、眞赤な頸巻をはめ、二つに分た髪にはブロン／＼香るベルシヤのライラックをベタ／＼塗りつけて居た。

彼は私を見ると椅子から飛び上つて、敬意を表したが、禮はしないで、兩顎の青白いゴムをむき出してニコ／＼した。そして、『や、ごうも』と嚙舌出した。初めてお目にかゝりました……併し私は祭りでお待ち申して居りました、永い間私も貴方の爲心配して居りました。何故今迄少つとも私共を顧みなさなかつたのです。ステバナからの御婦人方はお噂をしては笑ひ話をして居ります』

不圖何か思ひ出したのか、彼はワハ／＼と笑ひ出した。

『あ、今日は這麼戯談を申します。ハアハアハアハア……可笑しくて仕方がありません』

『何ういふ御用です？何が可笑しいんです？』と私は不快な念を陰さすに苛々しく尋ねた。

『祭りの後這麼ことがありました』とニキタは可笑しさの餘りドギレ／＼に云ふ。『ペレブロードの女共——ごうも申上ようがありませんが……ゑ、ペレブロードの女共が此のあたりに住んで居た巫女を捉へたのです。そしてね、野鄙な奴等が松脂をベタ／＼と塗り付けようとしたのです、しかし女は何うかして圍ひを切り脱けて逃げて仕舞ました。』

怕ろしい疑ひは私の心に閃めいた。私は突き進んで、激動のあまり己を忘れ彼の肩を激しく掴むた。

『何云つてる……空談は止し玉へ。君は何の巫女の事を云つてる？』
彼は急に笑ひを止めて、丸い驚いた目附で私を見た。

『私……私は……實際知りませぬ』と彼はまごころして口ごもる。『サムイリカ
どかマヌイリカ何と……違つて居たら御免。マヌイリカの娘だとか何と
姓共が云つて居ました。確かりした事は忘れませんでした……』

私は彼に見聞したまゝを委しく語れどて迫つた。

彼の話は拙なくて議論が合はず、こまかい處は何が何やらさつぱり分らぬので、
私は堪え兼ねて殆ど罵詈雑言せむばかりに質問した。彼の話では餘りよく分らなかつた
が、二ヶ月経つて、私は其の日祭に出て居た森の長の妻から此の悪むべき出来
事の一部始終を聞届けた。

私の心配は豫想通りだつた。オレシヤは自分の恐怖に打勝つて教會に行つたの
だつた。彼女が禮拜の中頃會堂に着いて入口近くに立つて居ると、已に來會して
居た百姓達は早速其れに氣がついた。

お務のある間百姓娘等は始終コソコソと話合つてはキヨロキオレシヤを見
て居た。

けれ共、オレシヤはジツト禮拜の終まで立つて居た。そして、敵意を以つて見
られて居たのが分らなかつた。ところが禮拜が終へると、女の一群が彼女を取り
圍んだ。見る間に段々人が集つてドシドシおし寄せて來る。最初彼等は黙つて不
法にも此の頼り無いおづくと四邊を眺めて居る乙女を見て居たばかりだつた。
すると野鄙な諧謔が彼方此方に起つた。粗暴な侮辱の言葉が、笑聲に供なつて
起つた。すると今度は一人一人のどよめきが一人の女の鋭い叫聲に沈んで他に
何にも聞えなくなつた。すると群衆は一しほ激した。

屢々オレシヤは此の怕ろしい人の輪を脱け出ようとしたが其の都度彼等は眞ん
中に突き返へした。急ちガヤンといふ聲々の中から或る老婆の痾高い聲が響いた

『タールを塗りつけろ！』

(小ロシヤでは、娘の住んで居る家の戸ですらタールを塗るといふ事は有る限り其の娘を侮辱する事になる)

と云ふ間も無く怒つて居る女達の頭の上にタール桶と刷毛が現はれて、手に手に渡し合つて居る。オレシヤは失望の餘り、一方に突き進んで足を踏み出した。

直ちに人々の群はワイノノと地上に鬨ぎ合ふと、十二人の者が聲を合せて飛び込む。けれ共オレシヤは奇蹟に依つて地獄から急に逃れ出で、帽子も冠らず、着物はズダズダになり、膚を幾處も露して前かゝみに逃げて行つた。

威赫、嘲笑、叫びに續いて石がピン／＼飛ぶ。五六人の者は乙女を追つかけたが直ぐ立止まつた。五十歩ばかりも走つてオレシヤも亦立止り畜生見たいな人群に自分の青白い、掻きむしられた、鮮血のにじむだ顔を向けて四邊に響き渡る程

高い聲で叫んだ。

『さ、わ！ 覚えて居れよ。お前さん達、皆誰でも後悔するからね』

目撃者が話して呉れた様に、此の威嚇は命令的預言的の調子で激しい怨恨で云はれたので蕭然として全衆は石の様に黙り返つた相である。けれ共暫らくすると復侮辱の新暴風が初まつた。

繰り返して置くが此の出来事の詳細な事は、ずつと後に聞いた事である。私はミンユチエンコの話を終るまで聞く力も忍耐も無くなつた。

さて私はエルモラが未だ馬の鞍を解かないで居る事だらうと思ひつくと、執達吏には一言も云はずに家を出て行つた。エルモラはやつぱり籬のあたりで馬を引つ張つて居た。私は惶惶、轡をはめ、腹帯を緊め、醉漢等を避けむ爲め間道をとつて森へと馬を走らした。

十三

狂氣の如くカバ〜と駆けつけた其の間の私の心的状態といつたら無い。暫時私は何處に行つて居たか何故行くのであるか全く忘れて居た、只何うも回復し難い不合理な怖ろしいもの、混乱した意識があつたばかり——恰も熱病の夢魔が人を襲ふ様な悲しい基礎の無い驚報の意識だ。

同時に——不可思議なる哉！……私の頭には馬蹄のカバ〜と盲目音楽師の鼻聲歌が止まなかつた。

『隣の敵の陣屋より』

トルロ人等がごよむ時』

マヌイーリカの家へと眞直に辿る狭い路に達すると、私は馬をおりた。馬は鞍褥の縁が白い泡の點々で蔽はれて皮はベツタリと衣裳にくつ附いて居た。それから手綱をとつて引いて行つた。さながら強烈な小止み無いポンプで水をぶつけられた様に、日の大熱と疾走との勢ひで汗が流れ血が頭に上つて来た。

幾度か鞭打つて馬を縛り、小舎に這入ると、オレシヤは居なくて、寒い凄然としたものが私の胸を捉えた。けれ共一分間たつと室の中が見わて来た。オレシヤは床に就いて顔を壁に向け、頭を枕に埋めて居る。戸が開つても動かなかつた。オレシヤの側の土間に腰掛けて居たマヌイーリカは辛と立上つて手先で私に只ならぬ由を告げた。『お静かに！音さして下さいますな』と婆さんは私に近づいて云つた。そして、其の寒い光澤あせた眼で眞面に私を眺めつゝ云ふ。

『貴方はお慰みがなくなりましたか、貴方は？』

『まあ祖母さん其麼段では無い。オレシヤさんは何うなさつたのです？』

『黙つて黙つて！オレシヤは無意識になつて寢て居ります。其れ丈の事です。貴方が用も無い處に来て、哀れな娘に悪運の鬨を出させなかつたら、何にも災は起らなかつたのに。私は馬鹿の様に黙つて見ぬ振りして見て居ました。そして始終私の心は私を疑つて居ました。私は貴方が茅屋にまぐれ込んで下さつた時からもう不幸の來ることを嗅ぎ附けて居ました。何です？貴方はオレシヤを會堂に行かせたのは自分では無いと仰しやるのですか、呪はれた貴族様？貴方、貴方で無くつて……』(婆巫女は急ち私を向いて、其の顔は悪くらしさに歪む)『云ひまぎらして狐の尾を出しなされるな、恥知らぬ方だ！貴方何故オレシヤを會堂に引つ張り込みなさつた？』

『私は引つ張り込んで居ません。それはね。オレシヤさんが自分に行きたい』

と思つて居られたのでせう』

『あゝ情無い！』とマヌイリカは手を捻つた。『オレシヤは教會堂から驚いて死ぬもの狂ひに走つて歸つて來ました。裾はビリビリ裂け、素頭で。そして鬼にでもとり附かれた様に有の儘を泣きつ笑ひつして私に話しました。其から泣いてばかり居ましたが今眠りました。まあ一息安心はしましたもの……さて、もう眠つたまゝ死んで仕舞ふのでせう。……手に觸つて見ますと赫々して……火に燒ける様です……一時間も走つたんですもの——可愛相に！暫は言も云へなかつたのです。貴方何うなさつたのです？オレシヤを何うなさつた？』と婆さんは復もや失望のあまりに叫ぶ。

忽ち婆さんの淡暗い顔は悲しく、又不思議な怖ろしい様を呈した。唇は引つ張つて兩隅が低くなる。全面の筋肉は緊張して顫へる。眉は深い皺ある額に鈞

り上つて縮む。豆大の涙はハラ／＼と何時にも無く落ちる。それから婆さんはテーブルに臂杖をつき、両手に頭を埋めて、身體中を前後にゆすり、低い引つ張り聲で呻いた「娘や！可愛いお前！あゝ、怖いね、怖いね！」

『まの婆さん其う被仰らないで』と私は強く云ひ出した『目をお醒ましになりますよ』

婆さんは黙つたが、やつぱり前後に身をゆすつて娘の顔を怕ろしい眼附で見つては涙をテーブルの上にはハラ／＼落した。

斯うして十分間過ぎた。私はマヌイーリカの側に腰掛けて、窓硝子に飛び當る蠅の單調なブン／＼とうなる音を腹立しげに聞いた。

『祖母さん』と突然、やつれた聲がした。オレシヤの微な聲である——『祖母さん誰です？』

婆さんはヘト／＼と床に進み寄つて復呻き初める。

『嬢、怖いね、祖母さんは怖い……』

『あゝ祖母さん止して、もう』とオレシヤは悲しい願に聲を苦しめて云つた『腰掛けて居らつしやる方は誰？』

私は注意して、趾立つて床に近づいた。誰も病床の邊で何時も経験する様に不安な氣の毒な感じがする。

『私ですオレシヤさん』私は低調に云つた『丁度村から来た處です。今朝、私は町に行つて居ました。御不快なのですか？』

枕から顔をあげないで、彼女は空中に何かを探すが如くに露はな手を延べた。私は意味を解して其の燃える様な手を握つた。大きな打傷が二つ、一つは手首、一つは臂に、はつきりと見えて居る。

『戀しい貴方』とオレシヤは徐ろに、絶々に云つた『貴方を……拜みたいんです
けれど……見えませぬわ。人が不具になしました……貴方、私の眼が貴方をお喜ば
せ申した事を……覚えて被居いますか？……眞乎に貴方をお喜ばせ申したでせう
？私は其れが大へんな喜びでしたのにもう私をご覧なさるもいまくしいでせ
う。何うしたんでせう、私……少つとも斯麼になりたくはありませんのに……』
『許して下さいね』と私はオレシヤの耳に俯しかんで囁いた。
彼女の燃える手は何時迄も堅く私の手を握つて居た。

『何をお考へなさいます？其麼事お考へなさるのもお恥です。貴方のお恥ぢや
ないんですもの。私の、愚な私の恥ばかりです。何故私は行つたんでせう、自分
ながら解らなくつて？ねえ、貴方、貴方の恥では御座いませんよ』
『オレシヤさん許して下さい……どうか許しますといふ約束をして下さいね……』

『約束しますとも、貴方の事ですもの』

『では、どうぞ私に醫者呼びにやらして下さい。お願いですよ！どうぞ、ねえ
醫者の云ふ通りになさつて下さいね。私の爲ですから』

『あ、貴方は……貴方は私を係蹄で捉えなされたのです！約束は御免下さつた
方がよいのです。私が眞乎に病氣で死際になつて居ますのなら、醫者の必要はあ
りませぬ。でも私は病氣になつてるのでせうか？驚いて斯うなつたんですもの。
晩になつたら癒るでせう。祖母さんが百合の汁か懸鉤子の茶を沸して呉ますでせ
う。醫者が何になりませう？貴方が私の一番よいお醫者様なんですもの。今お出
で下さつたばかりなのに、急によくなりましたもの。あゝ！只一つお願いがありま
す。私一寸の間でも貴方を見たくつて』私は枕からオレシヤの頭をもたげた。オ
レシヤの顔は燃えてほてり、其の黒い眼は異様な光に輝き、其の焦れた唇はブ

ル／＼顫えて居た。長い赤い爪痕が額にも頬にも首にも附つて居た。

『私をご覧なさいますな、何卒……私はもう悪らしい顔になりました』とオレシヤは私の目を其の手で蔽はうとして願ふ様に囁いた。

心は同情に漲つた。私は俯しかんで、蒲團の上に動かさずに置いて居るオレシヤの手に唇をあて、永くなづかしく接吻した。もとは、私が彼女の手に接吻すると急に「あらつ」と云つて引きこめるのだつたが、今度は此の愛撫を棄てず、他方の手で優しく私の髪を撫でた。

『悉皆御承知なのですか？』とオレシヤは秘そかに尋ねた。

私は静かに頭を下げた。事實をいへば、私はニキタの云つた事が分らないで居る。けれども私はオレシヤに今朝以來の出来事を思ひ起さして昂憤させたくはなかつた。オレシヤの虐待された事を思ふと制し難い激動の波が秘かに私を捉えた。

『あゝ私は其の時何故あなたのごとくに居なかつたらふ？』と私は狂氣じみて、立ち上りざま拳を握つて云つた。『私が居つたら……』

『もうお怒り下さいますな』とオレシヤは優しく云つて呉れた。

私は最早、喉と眼に塞がつて居つた涙を禁ずる事が出来なかつた。

オレシヤの肩に顔を埋めると私は聲を飲んで苦々しく全身を顫はして泣いた。

『泣きなさつてはいけません！泣きなさつてはいけません！』彼女の聲には驚きと情愛と同情とがあつた。『貴方、もう止して、止して下さい！私を苦しめなさつてはいけません、貴方。私もう大變よくなりましたもの。一緒に居ます間は泣きますまいね。最後の日を嬉しく過しませう。するとお別れが苦しくありませんから』

私は吃驚して頭をあげた。淡暗い前兆が勿言ち私の心を捉える。

『最後の日、オレシヤさん？何故最後の日です？何故別れねばなりません？』
オレシヤは眼を閉ちて暫らくつ黙て居た。

『私はお別れしなくてはなりません』とオレシヤは決然として云ふた。『私が直りますと直ぐ、祖母さんと私は茲を出て行かねばなりません。もう是より永く居る事は出来ません……』

『貴嬢は人を怖れて居られるのですね？』

『い、え私は何も懼れません。でも人は何故悪るい事をするのでせう？多分、御存じでないのでせうが……ヘレブロッツドで……私は悪くまれたり、威嚇されたり、恥かしめられたりしました。何事か突然村に不幸が起りますと、村の者は直ぐ私共に其の責を負せまます。若し牛が死んだり、小屋が焼けたりましたら、皆の爲に私共が恥かしめられるのです。祖母さん』—彼女はマスイーリカの方を向

して聲をあげた—『そうではありませんか？』

『何です？私は聞いて居なかつた』と婆さんは近寄つて娘の耳に手を置いて囁き出した。

『あのねえ、ヘレブロッツドに何事か災難があると何でも彼でも、あなたと私とに負はせられますもの』

『あ、そうだともく、オレシヤ、何でも罪は私共に落ちて来る。私共は廣い世界に住む處が無い。人は私共を亡ぼすのよ、二人共一緒に亡ぼささるのよ……人が茲から私共を追ひ出したら何うしよう？何う？先にも左様したんぢや無いか？私は、子供が死んだからとて馬鹿な痘痕女から……皆悪意で……非道な目に會はされた。私は悪るい事は夢見ても、考へても居無いのに、私を殺そうとするもの！其奴等が私に石を投げ附けるので、私は走り歸つてお前を守つた。私が居

るばかりで世の人が罪の無い此の子を意地めるもの。あゝ眞乎に彼奴等は野蠻人だ、絞架の鳥だもの！」

『けれど貴女何處にお出なさる！貴女は世界の何處にも親類も友達も無いではありませんか。だから新らしい處でお暮しなさるには金が入りますよ』

『何うかして金をつくりませう』とオレシヤは何の氣も無く答へた『金は祖母さんから出ます。祖母さんは何かで金を蓄めて居ます』

『うむ持つてる』と婆さんは床を離れながら不快相に答へた『涙で暖まつた—孤兒の金さ』

『オレシヤさん、しかしあなたは私を何うなさる？私の事は考へようともなさらないのですか』と私は胸中オレシヤに對し苦々しい惡意の湧き上るのを感じて叫んだ。

オレシヤは稍身をもたげ、婆さんの居るのも顧みず、兩手に私の頭を抱いて何べんもく目や頬に接吻した。

『私は何よりも貴方の事を一番懐つて居ます。でも何卒御免遊ばせ……運命があなたと同じ方に旅する事を私に許しませぬ。貴方は私が貴方の爲札を投げました事を憶えて居らつしやいますでせう。今札の豫言通りになりました。運命が私共に幸福を許さぬ事は明なんです』

『オレシヤさん貴嬢は復運命論をなさるのか？』と私は堪らなくなつて云ふた。

『私は其を信じたくない、私は決して信じない。』

『あら、いゝえ、いゝえ、さう被仰て下さいますな』オレシヤは懼ろしげに囁いた。

『私は自分の爲には怖くはないのですけれど、貴方の爲に……』

然し私がオレシヤを説き伏せる事は駄目だった。私は空しく悪運と悪民其の何れにも逆らふ事の出来ないオレシヤの平靜、亡び行く幸福の前を歩んだ。オレシヤは私の手に接吻して頭を振つた。「さへ、さへ、さへ、さへ。眞乎なんです。解つて居ますもの……と彼女は力を込めて主張する。『私共には悲の外何にもありません……何にも……何にも』

此の迷信の頑固さに驚きあきれて私は遂答へた。

『何だつて、お別れの時になると解ります』

オレシヤは考へた。忽ち青白い笑が唇のほどりにちらついた。

『其に就て短なお伽話を致しませう……或日狼が森の中に走つて居ましたら、小兎に會つて云ひました。』

兎どんく己がお前を食ふぞや！

けれ共兎は「助けてお呉れ、狼どん、私や、もつと永く生きたい。私や宅に小供を四五人持つて居ます」と云つて嘆願し初めました。けれ共狼は承知しない。そこで兎が云ひますには「それぢや私に三日の暇を下され、をした上で食つて下され。そしたら死ぬるのは何より易い事で御座います。」

狼は彼に三日の暇をやつたが、食ひはしないで見張つて居ました。一日經ち二日暮れ終三日が終へましたので、

「よし来た、用意しろ」と狼が云ひます。「東の間にお前を食つてやろふ」そこで兎は痛い涙を流して泣きました。

「あ、狼どん、お前は何故私に三日を許して下された？一番先に會つた時一口に食つて貰つた方がよかつたんだだけ。此の三日間、私や生きて居なかつた、私は只苦痛に耐え忍んで居た」

どうです。小兎は眞乎な事を云つたんぢやありませんか？何うでせう？』

私は、近づける孤獨の苦しき前兆に壓せられて黙止した。

オレシヤはゴソリと起上つて床上に座つたが、其の顔は嚴肅な表情となつた。

『あのね』……一息ついてオレシヤは……『ご一緒に居ました間、貴方は御幸福でしたか？お喜びなさつて下さいましたか？』

『オレシヤさん！貴嬢はどうでした？』

『一寸あの……貴方は私にお會ひ下さつたのがお悲いでせうか？貴方は、初めてお會ひ下さつた後、他の女の事を考へなかつたの？』

『いや少しも！貴嬢の前ばかりでは無くて、一人居つた時さへ私は貴嬢の外何にも考へなかつたのです』

『だつて何時ぞや私を妬ましく思ひなかつたでせう？時々私をご不満足に思召

したでせう？私を五月蠅く思ひなかつたでせう？』

『決して、オレシヤさん、決して！』

乙女は兩手を私の肩に置いて、何とも云へぬ愛の眼ざしで見入つた。

『其れではね、怒や苦痛で、決して私を憶えて下さいますな』と彼女は、私の眼の中に未來を讀むが如くして説明的に云つた。『お別れしましたら、初めは痛いのでせう、あゝ眞乎にお寂しいでせう！お嘆き遊ばすでせう、お楽しみが無くなりませう。けれど直ぐ何も彼も仕舞へて、滅却しますよ。そしたら直ぐに貴方はお悲しみが無くて只樂しく私の事を懷つて下さるでせう。』

オレシヤは再び頭を枕におろして、疲れた聲で囁いだ。

『それでは、さあお歸りなさいまし、お歸りなさつて下さいませ。私少つと疲れました。一寸……接吻して頂戴……祖母さんはこわかありません。祖母さんは

許して呉れます。祖母さん、ねえ、許しなされるのね？」

「あゝ、もうお別れをなさいよ〜」と婆さんは不満らしゆう云つた、「何を蔭して居るのかい？私にはちやんと知つてますよ……」

「茲に接吻して頂戴、もう一度茲に……茲にも」とオレシヤは指を眼や頬や口に當つて云つた。

「オレシヤさん！もう決してお目に掛られない様にお別れしなされるの？」と私は思はず叫んだ。

「私、存じません。存じません。何にも存じません！さあ、それでは左様なら。

もう一分間でも被居してはいけません……頭を御下げ下さいまし……私が何を悲しんでるか知つて居なされるの？と彼女は私の頬に唇をおしあて、囁ぐ。

「私は貴方が赤ん坊を下さらなかつたのが悲しくつて。あゝ私は持た無い兒を何

うして可愛がつたらいゝんでせう！」

私はマヌイリカと共に戸外に出た。

白いグル〜と輪になつた縁のある黒雲が天の半ばを蔽ふて居たが、夕日は猶輝いて、光に混じ、影を追ひつゝ、何か奇異な前兆を示して居た。

老巫女は掌で眼を蔽ひながら仰向いて、意義ありげに頭を振つた。

「今夜へレブロットには大夕立がありますよ」婆さんは自信ある調子で云つた
「其れは誰も知りませんか？多分雹も降りませう」

十四

私が丁度へレブロットに歸り着くと、俄然龍巻風が塵の大圓柱を吹き上げて大道に其を投おろした。同時にバラバラと重い雨粒が落ちて來た。